

創

平

造

和

す

が

る

未

。

来

を

防衛省

Ministry of Defense

Recruiting Information

防衛省総合職
入省案内 2025

防衛省

〒162-8801 東京都新宿区市谷本村町5-1
TEL. 03-3268-3111 (代表)



採用情報はこちらへ

防衛省採用WEBサイト
<https://www.mod.go.jp/j/saiyou/>

CONTENTS

02-03 防衛事務次官メッセージ／目次
04-05 組織図・任務

06-07 特集1 平和を守る使命
—— 3文書策定対談

MISSION 政策と職務

- 08-09 防衛政策の立案
- 10-11 様々な事態への対応
- 12-13 情報の収集分析
- 14-15 防衛力の整備
- 16-17 安定的な運用のために
- 18-19 装備政策の展開

20-21 特集2 平和を守る使命
—— 在外邦人等輸送対談

22-23 特集3 平和を守る使命
—— 局長インタビュー

施設・装備系技官の職務

24-25 技官の役割

26-29 施設系技官の紹介

30-31 CROSS TALK 地方勤務紹介対談

32-35 装備系技官の紹介

- 36-37 事務系キャリアパス
- 38-41 職員からのメッセージ
出向・地方・海外・
留学職員の紹介
- 42-43 職員の1日の流れ
- 44-45 若手職員に聞くQ&A
- 46 ワークライフバランスを支える制度
- 47 採用メッセージ・採用実績

MESSAGE

「修身齐家治国平天下」
古来より、自分の行いを正しくし、
家庭を整え、国を治め、
そして世の中を平和にするべきと言われている。

防衛省が担うのは、「国家存立の根幹」。
それは、歴史的なパワーバランスの
変化に直面している世界の中で、
日本の平和に責任を持つということ。

常に新しく大きな課題に迫られる防衛省にとって、
「あなた」の成長が課題解決の原動力になる。
防衛省には志を同じくする27万人の仲間がいる。
その仲間とともに、家族の支えを得ながら、
日本と世界の平和のため、成長してほしい。

防衛省は、ともに新たな道を切り拓く
「あなた」を求めています。

防衛事務次官 増田 和夫



組織図 任務

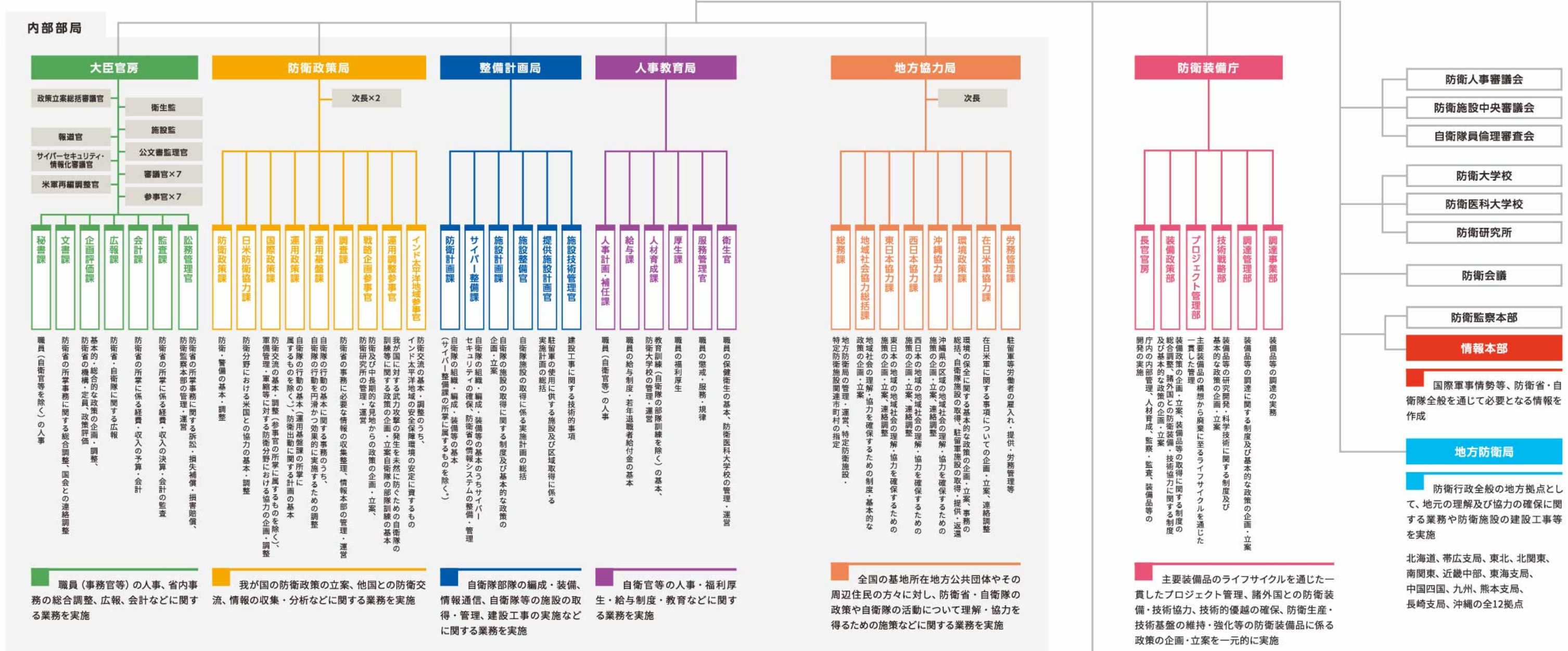
Organization & Mission

安全保障環境を踏まえ、先進的な防衛政策を立案し、それを部隊編成、基盤整備、人事、地元自治体からの協力確保、諸外国との連携などに反映させていく各部局。これらが有機的に結び付き、相互に緊密に連携を取りながら役割を果たすことで、防衛省は安全保障という大きな責任を果たしています。



自衛官募集 Website

自衛官の採用に興味がある方は、
こちらから詳細をご確認ください。



国家公務員採用試験	総合職	事務系	技術系	試験区分
防衛省専門職採用試験	一般職	事務系	技術系	【本省内部部局採用】
				行政職
				研究職
				【採用機関】本省内部部局、本省所在機関、防衛大学校、防衛医科大学校、統合幕僚監部、陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊、情報本部、地方防衛局、防衛装備庁
防衛省専門職採用試験	専門職	事務系	技術系	【試験区分】英語、中国語、朝鮮語、ロシア語、フランス語、アラビア語、ペルシャ語、インドネシア語等
				【採用機関】本省内部部局、防衛装備庁、情報本部、陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊

*採用機関によって、採用する言語(試験区分)は異なります。

防衛事務官とは 「安全保障」という国家存立の根幹を担う防衛省。世界各国との安全保障協力、国際平和協力活動、大災害への対応、陸・海・空だけではなく、宇宙・サイバー・電磁波といった新たな領域においても求められる安全保障の取組など、防衛省が必要とされるフィールドは多岐にわたります。「我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つ」という使命のもと、日々新たな課題に対応しています。

防衛技官とは 防衛省は、我が国の平和と独立、安全を守り抜く最後の砦。ほかの誰にも代えがたいその任務を担う者の中に、理系の専門性を活かし防衛行政に携わる職員、「防衛技官」がいます。防衛技官は、自衛隊の飛行場・港湾・駐屯地といった「防衛施設」の整備や戦車・護衛艦・戦闘機等といった「防衛装備品」の取得、関連する政策の企画・立案を主な任務とし、日々新たな課題に対応しています。



総合職事務系、総合職施設系、
総合職装備系以外の各職種の採用情報は、
防衛省ホームページをご覧ください。

全国の基地所在地方公共団体やその周辺住民の方々に対し、防衛省・自衛隊の政策や自衛隊の活動について理解・協力を得るための施策などに関する業務を実施

統合幕僚監部

首席参事官・参事官

実際の部隊運用に関する業務を、対外説明や関係省庁との連絡調整を含め一元的に実施

主要装備品のライフサイクルを通じた一貫したプロジェクト管理、諸外国との防衛装備・技術協力、技術的優越の確保、防衛生産・技術基盤の維持・強化等の防衛装備品に係る政策の企画・立案を一元的に実施

陸上幕僚長 陸上幕僚監部	海上幕僚長 海上幕僚監部	航空幕僚長 航空幕僚監部
陸上自衛隊の部隊及び機関	海上自衛隊の部隊及び機関	航空自衛隊の部隊及び機関
共同の部隊 自衛隊情報保全隊 自衛隊サイバー防衛隊		
共同の機関 自衛隊体育学校 自衛隊中央病院 自衛隊地区病院 自衛隊地方協力本部		

本組織図は組織の特徴等を表現するため、防衛省の組織全てを精緻に表したものではありません。

我が国の安全保障史において、歴史的一步を刻んだ戦略3文書。 その策定の中で、政策当事者たちは何を思ったのか。

2022年12月、国家安全保障会議及び閣議において、「国家安全保障戦略」「国家防衛戦略」「防衛力整備計画」を策定しました。「戦後の防衛政策の大きな転換点」と評されるこの戦略3文書の策定に携わった3名が、その思いややりがいについて語りました。

3文書の意義について どうとらえていますか。

職員A: 我が国が戦後最も厳しくかつ複雑な安全保障環境に直面する中、今後の安全保障政策の基本方針を示すものが「国家安全保障戦略」「国家防衛戦略」「防衛力整備計画」の戦略3文書です。我が国の安全保障・防衛政策の歴史的転換点となる文書で、防衛力の抜本的強化、反撃能力の保有、防衛費の大幅な増額を示した点が大きな特徴と考えています。

職員B: 15年前に私が防衛省に入省したときは、北朝鮮が「人工衛星」と称するものを打ち上げると事前に公表し、何日前に弾道ミサイル等破壊措置命令が自衛隊に初めて下令されたという状況でした。それから情勢は大きく変わりました。複数回にわたる核実験を行い、ミサイル技術もどんどん向上している。技術的には日本を射程に収める弾道ミサイルに核兵器を搭載し、我が国を攻撃する能力を既に保有しているとみられるまでになった。中国についても、空母を持ち、海上・航空戦力が日本の南西諸島などを抜けて太平洋に進出したり、南シナ海では急速かつ大規模な埋立てをして軍事拠点化を進めています。入省後、こうした様々な事象に直面し対応する中で、変化を肌で感じ、年次を重ねるごとに安全保障環境が厳しさと複雑さを増しているという実感を強く持っていました。今回の3文書は、こうした厳しい現実と正面から向き合った防衛政策の大きな転換点だと考えており、個人的にも「このままではいけない」という思いもしっかりと反映させられたと思っています。

職員C: 3文書の議論の過程で、国民の皆さんの意識も変わりました。21世紀に入って国家とテ

職員B

地方協力局 沖縄協力課
前任部員
(当時：防衛政策局 防衛政策課 基本政策班長)
2009年入省 事務系



ロとの戦いという構図が続いた後、ロシアによるウクライナ侵攻を目の当たりにして、国家と国家の戦いというものを改めてリアルに感じたためか、世論調査等にも表れたように、防衛力の強化を支持する声が大きくなったのではないかと考えます。これは霞が関全体についても言えることで、これまで安全保障は防衛省と外務省の仕事という意識が強かったのに対し、これからは他の省庁も力を合わせ、一体となって取り組まなくてはならないという意識に変わりました。こうした考えが国家安全保障戦略には反映されており、安全保障上の課題をオール・ジャパンで解決する体制を構築できたという点も、非常に画期的だと思っています。

3文書策定には どのように携わりましたか。

職員C: 私は国家安全保障局に出向し、3文書の最上位政策文書である「国家安全保障戦略」に盛り込むべき要素の整理・検討や関係省庁との



職員C

防衛政策局 防衛政策課
総括班長
(当時：内閣官房 国家安全保障局 参事官補佐)
2009年入省 事務系

調整等に携わりました。防衛省の観点のみならず、高い視座で今後10年間の日本のあるべき姿を議論し、政策文書に落とし込んでいきました。国益とは何かという根本から議論し、悪化する安全保障環境の中現状維持だとどうなるか、どんな能力を強化しなければならないのか、防衛省を中心に議論を重ねました。加えて、政府外の学者の先生やメディアの方など有識者からのヒアリングもかなりの回数を重ねましたし、国会においても国民の代表たる議員の先生方との議論も相当やりました。様々なインプットを踏まえつつ自分の思いを文書の中に入れ込めたのではないかと思います。

職員B: 私は「国家防衛戦略」策定の担当班の班長として参画しました。もちろん他省庁とも密接に連携しますが、国家防衛の幹となる部分は防衛省がつくるわけです。防衛省の考え方を、国家安全保障局然り、総理官邸などにもしっかりと伝達しながら進めていきました。実は、防衛省出身者は総理官邸を始め様々な組織で活躍しています。そういう方たちとも密接に連携していました。また、多くの人が関係する大事業ではありますが、策定の意思決定プロセスに携わるのは少人数であり、非常に刺激的な経験でした。

防衛省・自衛隊だけでも非常に多くの関係者による検討があり、政治家、専門家など様々なアクターがいる中で一つの戦略文書にまとめているというのは、大きなダイナミクスに身を置くことでもあり、辛い場面も多々ありましたが(笑)文書を世の中に生み出したときは本当に大きなやりがいにかわりました。

職員A: 私は「防衛力整備計画」の取りまとめ担当として、自衛隊の将来体制や必要な装備品など、我が国が保有すべき防衛力について関係部署と検討・調整を繰り返し行い、文書に落とし込みました。この過程では、過去の延長線上ではなく、いかに国民の命を守っていくか、シミュレーションを始めとする様々な検討を行いましたので、我が国にとって必要な防衛力を積み上げることができたと思います。個別の装備品を詳しく書き込むなど、各幕僚監部の意図を十分にくみとりつつ関係省庁と調整を行ったため、ギリギリの文言調整となりました。しっかりとした議論を十分に重ねることができたと確信しており、まさに歴史に残る仕事に携われたことを誇らしく感じています。

職員B: ギリギリの文言調整、これは皆が苦労した点ではないでしょうか。というのも、文言の一つ一つが、国民はもちろん、国際社会に対する日本政府のメッセージとなるんです。だからこそ、防衛力の抜本的強化の内容はもちろん、同盟国・同志国等と協力・連携の方向性もそうですし、どの国をどう評価するかという点も、本当に注意深く検討してきましたよね。

職員C: 例えば、中国という国をどう評価するかという点は、議員の先生方も含め、内外で関心の高い論点の一つでした。経済的に結びつきの強い隣国である一方で、尖閣諸島周辺の動向などを見ても力を背景にする一方的な現状変更の試みを継続するといった厳然たる事実もあります。こうした点を踏まえ、その動向を我が国や国際秩序に対する「挑戦」と表現することにしました。我々が戦略を発表する少し前の2022年10月、米国も国家安全保障戦略を発表し、中国の動向を“challenge”と表現しており、こうした点からも日米の戦略が整合していると言えるのではないかと思います。

3文書策定を経て 防衛省職員に求められること、 期待する人材像について お聞かせください。

職員A: 拡大する防衛省の業務を考えると、私自身もこれから未知の分野についてしっかりキャッチアップしなけ

ればならないと考えています。これから入省される皆さんも、自分の知らない領域にも臆することなく飛び込んでいけるチャレンジ精神を大切にさせていただきたいですね。前例にとらわれることなく、クリエイティブに考えて行動できる方と一緒に仕事ができれば嬉しく思います。

職員B: 防衛省で働く一番の魅力は、「安全保障」を自分ごととしてとらえられることだと思います。そのためには幅広い知識と同時に深い専門性が要求されます。多様な分野のプロフェッショナルと正面から対峙できるだけの知識を身につけるためにも、強い好奇心と向上心をお持ちの方に期待しています。もちろん私自身も、15年前の入省当時には考えも及ばなかった分野も勉強していかなければならないと強く感じています。加えて、防衛省・自衛隊は約25万人を擁する巨大な組織なんですね。総合職として組織を動かしていくためには「人」として魅力がある、信頼されていくことも必要じゃないかと思います。

職員C: 防衛費の大幅な積み上げもあって、今後、我々が取り組むべき事業、業務が一気に増えていくことは間違いありません。オール・ジャパンでと申し上げたとおり、他省庁を巻き込んだ仕事も増えていくはずですよ。霞が関にとどまらず、防衛産業との連携・協力も課題となってきます。今まで以上に広い視野で、防衛政策、安全保障政策に携わる意識が求められるでしょう。ですから求める人材についても、特定の政策に取り組みたいというのではなく、常に好奇心を持って幅広い業務に取り組める方に期待します。

私たちは、20年、30年後という遠い将来の日本の姿を描かねばなりません。簡単に答えが出るものではありませんが、それでもやらねばならないんです。自分たちの子どもの世代やさらにその先の世代が今より繁栄していて欲しいと願うのが、国家で働くということではないでしょうか。そのために自分が何をすべきか、自分ごととして考えられる人には是非入省してもらいたいですね。



職員A

整備計画局 防衛計画課
防衛力整備計画班防衛部員
2017年入省 事務系



MISSION

01

使命感を胸に英知を結集し、 我が国の防衛政策を立案

刻一刻と変わる国際情勢を踏まえ、
自衛隊が国際社会で果たすべき役割や将来を見据えた中長期的な戦略など、
様々な角度から議論を行い、防衛政策の企画・立案を行います。

我が国の 安全保障政策 の立案

- 我が国防衛の基本方針を考える
- 相手の能力と新しい戦い方に
着目した防衛能力の抜本的強化
- 国全体の防衛体制を強化
- 国家防衛戦略

日米同盟による 共同抑止・対処

- 日米同盟の抑止力・対処力の強化
により、日米の意思と能力を顕示
- 日米安保安全保障条約
- 日米防衛協力のための指針

同志国 との連携

- 地域や各国の特性等を考慮した、
多角的・多層的な防衛協力・交流
- 円滑化協定（RAA）
- 物品役務相互提供協定（ACSA）
- 共同訓練・演習
- 能力構築支援

Tips：防衛力と脅威

脅威は能力と意思の組み合わせで顕在化しますが、他国の意思を外部から
正確に把握することには困難が伴います。
戦後、最も厳しく複雑な安全保障の中で、自国を守るためには、力による一
方的な現状変更は困難であると認識させる抑止力が必要であり、相手の能
力に着目した自らの能力、すなわち防衛力を構築し、相手に侵略する意思を
抱かせないようにする必要があります。

Personnel Introduction



「
平和な日常を守りぬくために
我が国の安全保障環境を創出する



防衛政策局 防衛政策課
基本政策班防衛部員
2013年入省 事務系

同盟国・同志国との 協力の在り方について検討を重ねる

私が入省した約10年前に比べ我が国を取り巻く安全保障環境は大きく変
化し、周辺国はミサイル発射や軍事的示威活動を急速に拡大・活発化させ
ています（詳細は私が編集担当した5年版白書巻頭特集をご覧ください）。
こうした厳しい状況にあっても平和な日常を守りぬくために、防衛政策局
では、日本の安全保障に関する基本的な方針を考え、我が国自身の防衛
力の抜本的強化の実現に向けた取組を推進し、日米同盟の強化に向け、
日米双方でどのような取組・活動を行うか協議し、さらに望ましい安全
保障環境を創出するために同盟国・同志国などと連携すべく、協力の在
り方について検討を重ねています。

日本の安全保障実現のために ワンチームで挑むやりがい

日本の防衛はどうあるべきか、その実現に向けて今後取組むべきことは
何か、そして実際に推進するための施策をまとめる、防衛政策課はこうし
た役割を担っています。最近の例では、より厳しい安保環境を踏まえ、攻
撃されない安全な距離から相手部隊に対処するスタンド・オフ防衛能力
構築の更なる前倒しを図るべく、大臣指示の下、トマホーク導入の前倒し
という案件に臨みました。実現に向け、国内の関係部局と調整し、米側と
交渉、対外公表のための各種準備等の総合調整を防衛政策課は担いまし
たが、関係者がまさに「ワンチーム」となり、前倒しできた時の達成感は何
物にも代えがたいものです。皆さんが「チーム」の一員となる日を楽し
みにしています。

Personnel Introduction



「
我が国の平和と独立を守る
防衛省の業務の重要性を実感



防衛政策局 国際政策課
(併) インド太平洋地域参事官付 総括班係員
2023年入省 技術系(装備系)

自らが主体的に日本の 平和に貢献したいと思い、入省を決意

私は航空宇宙工学を専攻していたこと・行政の仕事に興味があったこと
から、航空機に関連のある省庁で働こうと思い、防衛省の説明会に参加
しました。そこで日本を取り巻く安全保障環境の厳しさについて説明を聞
く中で、主体的にこの国の平和に貢献したいと思い、防衛省への入省を決
めました。
入省して半年が経ちますが、我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つ防
衛省の業務の大変さを実感しています。だからこそ、所属する課の法案が国
会で可決されたときや、防衛相会談などのハイレベルな会合が成功裏に終
了したとき、大きな達成感の得られる仕事です。
少しでも興味を持っている方へ、是非一度説明会に足を運んでみてください。

入省1年目から各国との 防衛協力・交流の最前線に携わる

現在、国際社会は戦後最大の試練の時を迎えています。日々の生活でも
関連するニュースを見ることが多いのではないのでしょうか。
私の所属する国際政策課・インド太平洋地域参事官付では、一か国でも
多くの国々と連携を強化するために日々業務に取り組んでいます。私は1
年目の職員として、所属する国際政策課・インド太平洋地域参事官付に
て国会業務・他課との調整窓口・ロジ(段取り)面のサポートをしています。
各国との防衛協力・交流の最前線に携わることができる、替えの利かな
い業務です。また、同志国等と協力・連携を深めていく現場を間近で見
ることができ(1年目ですが、国内外出張の機会もあります!)、刺激的
な日々を送っています。

MISSION

02

様々な事態に対応し、 国民の生活を守る

弾道ミサイルの飛来や国内での大規模な災害などの様々な事態に対し、
部隊の活動を円滑に遂行するための枠組みを整備します。

様々な事態 への対応

- 警戒監視活動
- 弾道ミサイル等の経空脅威への対応
- 国民保護
- 在外邦人等の保護・輸送

大規模災害 への対応

- 迅速な展開
- 初動対応部隊

Personnel Introduction



統合幕僚監部 首席参事官付
国内運用班長
2013年入省 事務系



「自らが国の安全保障を前進させていることを
実感しない日はない

安全保障のための リスクの低減と行動の自由

「長官、わが海軍は昔から海上封鎖をこなしてきたのです。黙って任せてください。上手くやります。」

「いいや提督、私の許可なくその船を砲撃することは認めない。」

キューバ危機がその頂点に達した1962年10月23日、マクナマラ米国防長官は、部下のアンダーソン海軍作戦部長とこんな会話を交わしたそうです。当時、アメリカはキューバに向かうソ連船舶の海上封鎖を行っており、二人は封鎖線に近づきつつある船への対応を議論していました。このやりとりには、ソ連との武力衝突のリスクを極限まで低くしたい長官と、効果的な作戦遂行のために行動の自由を確保したい軍人との間の対立が克明に表れています。

自衛隊の適切な運用のために 国会や他省庁との調整に奔走

私が所属する首席参事官付の任務は、自衛隊の運用を担う統合幕僚監部において、左記の事例とまでは言わずとも、時に衝突しうる政策的必要性和運用上の合理性の整合を図ることです。私は日々、自衛隊の運用について国会や他省庁に説明して理解を得たり、或いは逆に省外からの要望を運用に反映したりするための調整に奔走しています。近年、北朝鮮の弾道ミサイル対処から周辺海空域の警戒監視に至るまで、自衛隊を運用する機会は増える一方で、自分が自衛官や他省庁と一体になって日本の安全保障を前進させていることを実感しない日はありません。国のために働きたいと願う皆さん、ぜひわが省の門を叩いてください。後悔はしないと思います。

Personnel Introduction

「“平和は究極のインフラ” 自衛隊と
国民の“架け橋”になるやりがい



統合幕僚監部 首席参事官付
総括班係員
2023年入省 技術系（施設系）

自衛隊と一番近い“防衛省らしい” 業務に1年目から携わる

統合幕僚監部首席参事官付は、ミサイル対処、対領空侵犯措置、災害派遣、PKO、在外邦人等輸送、海賊対処をはじめとする、日本国内にとどまらない世界中における自衛隊のオペレーションについて、関係機関との調整や対外的な説明などを行い現場部隊を支える、まさに、部隊と国民の「架け橋」の役割を担う課です。事態対処の際には1秒でも早い対応が求められ、自分が行う業務が国民の安心・安全に直結するのだと、大きな緊張感と責任を感じながら業務をこなしています。反省することも絶えませんが、部隊と一番近いこの課でしか経験できない“防衛省らしい”業務に1年目から携わることができ、刺激的な毎日を送っています。

私の業務が国民の安全・安心に 直結する緊張感と責任

東日本大震災で大規模な停電の被害を受け、「日常の安全が失われる不安や恐怖」を経験した私は、「人々の安全・安心を護る仕事がしたい」と考えるようになりました。「平和は究極のインフラ」という採用担当の方の言葉で、自然災害をはじめ、すべての脅威から国民を護ることのできる「究極のインフラ整備」に自分も携わりたいと感じ、防衛省への入省を決めました。現在勤務する統合幕僚監部首席参事官付では、1年目からミサイル対処や在外邦人等輸送、災害派遣といった自衛隊のオペレーションに関わっており、まさに「究極のインフラ整備」という大きな仕事の一端に携わっていることを強く実感する日々です。

MISSION

03

日本を守るための 情報を収集、分析する

中長期に至るまで安全保障環境のトレンドを把握し、
事態の兆候がある場合には速やかに察知できるよう、
隙のない総合的な情報収集・分析を行います。

情報収集・分析

- 電波情報・画像情報・地理情報・
警戒監視情報・公開情報の収集
- オールソース分析

国内外の 情報機関との 情報交換

- インテリジェンスコミュニティ
との協力
- 国外の情報機関との連携
- 防衛駐在官の派遣

ユーザーへの 情報提供

- 情報ニーズの把握
- 適時・適切な情報支援
- 対外的な情報発信

インテリジェンス 機能の強化

- インテリジェンスサイクルの活性化
- 最新技術・新たな手法の活用
- 認知領域を含む情報戦への対応

Personnel Introduction



防衛政策局 調査課
情報運用企画室企画班防衛部員
2016年入省 事務系



留学中のひと時

優れたインテリジェンスが
安全保障に係る国家の意思決定を導く

国がベストな選択をするために
多様な情報を統合し迅速に伝える

このパンフレットを手にとられた皆さんの多くは、就職という大きな決断を前にして、様々な媒体から情報を集め、社会人から話を聞き、ベストな選択肢を模索しているのではないのでしょうか。国家においても同様で、より良い意思決定には優れたインテリジェンスが欠かせません。防衛省インテリジェンスの強みは、公開情報に加え、電波・画像・地理情報や防衛駐在官からの情報等、多様な情報源を持つところだと考えています。一方で、数多の情報がある分、それらを統合することや、迅速にカスタマーへお届けすることに難しさがあるとも感じます。情報政策の「司令塔」たる調査課の一員として、挑戦がいのある課題に日々取り組んでいます。

情報を一つ一つ積み上げることが
重要なインテリジェンスになる

高校生まで、国防について考えたこともなければ自衛隊の存在を意識することもなく、のほほんと生きていました。そんな私が防衛省を志望するようになったのは、大学で「破綻国家」について学ぶ機会があり、翻って日本で平和を享受できる有難みと、平和を保つための地道な努力が重ねられていることに気付き、自分もその取り組みを担っていきたいと思ったからです。情報業務は地道な努力の典型で、一つ一つの情報が些細なものであっても、根気よく積み上げていくことで国家にとって役に立つインテリジェンスになっていきます。そう考えると、まさに入省時にやりたいと思っていたことに取り組んでいるんだな、と実感します。

Personnel Introduction



防衛政策局 調査課
総括班係員
2022年入省 事務系



安全保障に必要不可欠な
情報政策の司令塔を担う

新たなイシュー情報戦に対する
防衛省全体の体制づくりに携わる

情報は軍事、経済、外交と並ぶ安全保障上の力の源泉です。私は防衛省の情報政策の司令塔である調査課で、総括班として課内の取りまとめや他省庁のインテル機関と調整を行うとともに、安全保障の新たなイシューである情報戦について、防衛省全体の体制づくりに携わっています。ウクライナ侵略におけるロシアしかり、SNSをはじめ様々な媒体による偽情報の拡散は、いまや国際社会全体の深刻な脅威です。偽情報や誤情報をしっかりと見極め、我が国の意思決定そのものを防護する。そのために不可欠な体制作りにおいて、具体的な施策の企画立案や国際会議での各国とのやりとりなど、イニシアティブをとって省全体の取組に積極的に貢献しています。

日々新たな挑戦に防衛省の
ワン・チームで臨める環境がある

私は、既存の国際秩序が不安定化する中で、全ての国民が自己実現できる平和な日常を守りたいと思い防衛省を志望しました。入省前、欧州を旅行中にウクライナ戦争が始まり、日本を守りたいという思いをより強くしました。入省後は、防衛予算の大幅増や次期戦闘機の3か国共同開発、戦略3文書の改訂等、防衛政策の歴史的転換点に立ち会いました。若手でも意志と能力を示せば大きな仕事を任せてもらえる環境で、日々やりがいと興奮を感じています。防衛省に求められる役割・期待は年々高まっており、日々新しい挑戦に省全体のワン・チームで臨んでいます。高い志と能力を持った皆さんと、一緒にチームで戦える日を楽しみにしています！

MISSION

04

自衛隊の活動を支える 防衛力の整備

戦い方の様相が大きく変化する中、新しい戦い方に対応できるかどうかは今後の防衛力を構築する上で大きな課題です。

航空侵攻・海上侵攻・着上陸侵攻といった伝統的なものに加えて、精密打撃能力が向上したミサイルによる大規模な攻撃、情報戦を含むハイブリッド戦の展開、宇宙・サイバー・電磁波の領域や無人アセットを用いた非対称的な攻撃等を組み合わせた新しい戦い方が顕在化しています。

こうした新しい戦い方に対応していくために、自衛隊に必要な「人」や「モノ」、自衛隊の体制を整備します。

遠距離から
侵攻戦力を
阻止・排除

- スタンド・オフ防衛能力
- 統合防空ミサイル防衛能力
- スタンド・オフ・ミサイル
- ミサイル防衛システム

領域を横断して
優越を獲得し、
非対称的な
優勢を確保

- 無人アセット防衛能力
- 領域横断作戦能力
- 指揮統制・情報関連機能
- 衛星コンステレーション
- サイバー防衛隊
- システム・ネットワーク

人的基盤の強化

- 自衛隊の精強性の確保
- 教育・研究の充実
- 女性の活躍推進
- 働き方改革

防衛施設の
グランド
デザイン

- 自衛隊の活動基盤の整備
- 司令部等の地下化や構造強化
- 既存施設の再配置・集約化
- 防衛施設の強靱化への投資を加速

Tips: 我が国の防衛上必要な能力・機能

- ①スタンド・オフ防衛能力 ②統合防空ミサイル防衛能力 ③無人アセット防衛能力
④領域横断作戦能力 ⑤指揮統制・情報関連機能 ⑥機動展開能力・国民保護 ⑦持続性・強靱性

Personnel Introduction



整備計画局 防衛計画課
業務計画第1班長
2013年入省 事務系

日本の安全保障を担う防衛省は 人生をかけるに値する“面白い”職場

日本の防衛力の未来を描き 迅速に実行する

戦後最も厳しい安全保障環境の中であって、我が国の平和と独立を守り抜いていく。そのカギとなるのが、防衛力です。防衛力は、平時にあっては抑止力や力強い外交の下支えとして、万が一抑止が破れた場合には、国民を守る最後の拠り所としての役割を果たします。装備品、部隊組織、施設や通信等の整備を通じて、この防衛力の構築・強化を担うのが整備計画局です。

私の所属する防衛計画課は、5年後、10年後を見据えた日本の防衛力を描き、そして迅速に実現するという使命を達成すべく、日々業務に取り組んでいます。課の業務を一言でお伝えするのは難しいのですが、新しい戦い方に基づく各自衛隊の装備品の取得、部隊の新編・改編・配置等の構

想について、資源の制約や国際情勢・国内情勢を踏まえ、より効率的な施策への磨き上げや優先順位付けを行い、自衛隊全体として最適な防衛力整備の方向性を決定することが中心的な役割となります。また、防衛力整備の方針について、国会や予算プロセス等を通じて対外的に説明を行い、理解や納得を得ることも重要な役割です。

戦略的なビジョンを、防衛力という具体的な形に落とし込んでいくことは、数多くの関係者が関わる非常に大きなオペレーションであり、その実行に当たっては、計画時には想定しえない障害や困難、いわゆる「摩擦」がついてまわります。日々登場する「摩擦」に足を取られ、頭を悩ましながらも、皆で知恵を絞って乗り越えていく。大変ではありますが、他では味わえないような充実感のある毎日です。

安全保障は様々な要素が ダイナミックに関わる総合格闘技

安全保障は知の総合格闘技である、という言葉聞いたことがあります。狭義の軍事だけでなく、外交、経済、科学技術、価値観、そして人間性（human nature）といった様々な要素がダイナミックに交差する領域が安全保障であり、国家や社会の生存にも直結する重要性和相まって、噛めば噛むほど味が出る深さと奥行きがあります。そんな日本の安全保障の中核を担う防衛省は、40年の職業人生をかけるに値する「面白い」職場だと思います。国民の生命と平和な暮らしをこれからも守り抜いていく、そのために必要なものは何か一緒に考え、その実現に共に汗をかく仲間、これをお読みの皆さんが加わってくれと嬉しいです。

Personnel Introduction



整備計画局 施設計画課
総括班係員
2023年入省 技術系（施設系）

防衛力の基盤となる自衛隊施設の 整備計画を企画・立案

自衛隊の継戦能力を高める上で、防衛力の持続性・強靱性の基盤となる自衛隊施設の機能を確保することは非常に重要です。私が所属する施設計画課では、自衛隊施設の整備計画を企画・立案しており、老朽化対策に加えて、災害や武力攻撃等に対する抗たん性の向上など、「施設の強靱化」の推進に重要な役割を果たしています。また、駐屯地の新設など、部隊新編や新規装備品の導入に伴う施設整備を計画しており、九州・南西地域における防衛体制の強化に貢献しています。このような政策を実現するためには、省内の様々な部署と意見のすり合わせが必要であり、私は課内の窓口として、他部署との調整を行い、課内の担当が円滑に業務を遂行できるよう、取りまとめています。

「平和という究極のインフラを整備する」考えに 共感し入省を決意

私は大学では、インフラ整備の研究をしていましたが、就職活動中に、施設系技官の仕事は、「平和という究極のインフラを整備すること」という考えに共感し、防衛省を志しました。施設計画課では、防衛施設に関する課題、今後の方針、対外的な説明など、様々な情報に触れられるため、日々勉強に励んでいます。また、防衛力の抜本的強化の一つとして、防衛施設の強靱化の推進に関わることができるのは、大きなやりがいとなっています。防衛施設への投資は今まで以上に加速しており、防衛施設が抱える様々な課題を解決できるこの機会に、皆さんと一緒に取り組みたいと思います。

MISSION 05

自衛隊や在日米軍の 安定的な運用のために

多種多様な施策を実施し、
国民や地域社会の理解と協力を得るための地道な努力を積み重ねることで、
自衛隊や在日米軍の円滑な運用を可能にします。

防衛施設と 周辺地域との 調和

- 施設の設置や航空機の運用などに伴う騒音などの障害の防止、軽減、緩和
- 地域住民の生活環境の安定や向上に資する事業等への助成

地域 コミュニティ との連携

- 日頃から積極的な広報・説明
- 地方公共団体、警察・消防等の関係機関との連携の強化

在日米軍の 駐留を支える ための施策の 実施

- 米軍再編事業の着実な実施
- 在日米軍で勤務する従業員の労務管理
- 在日米軍施設の整備
- 訓練や訓練移転等の円滑な実施

環境問題・ 気候変動問題 への対応

- 自衛隊・在日米軍に起因する環境問題と地域社会との調和
- 気候変動対策と防衛力強化の両立

Personnel Introduction



安全保障の土台づくりが
地方協力局のミッション



地方協力局 総務課
総括班長
2011年入省 事務系

防衛省の役割が拡大する中 プロジェクトを着実に実現していく

自衛隊や在日米軍の活動について、地域社会の協力を得るための施策を実行していく。「地元調整」と称される地方協力局の業務は、就職活動中の皆さんの目には、安保政策の企画等と比べ、地味な仕事に映るかもしれません。

しかし、三文書の策定に見られるように、防衛省に求められる役割が、かつてないほど大きくなる中で、地方協力局のフィールドもまた、これまでに以上に広がってきています。

三文書で策定されたプロジェクトが、「絵に描いた餅」とならないよう、関係自治体と丁寧に調整しながら、一つ一つ着実に実現していく地方協力局は、安全保障の足腰を作っていく仕事をしています。

国民目線からなすべきことを 「あたりまえ」の視点を忘れない

防衛省の門を叩いたとき、「防衛省職員に求められる能力は何か」という学生からの質問に対し、採用担当者が、「3つのCで、communicationとcommon senseと…」と答えていました。もう一つが何だったか思い出せないのですが、とにかく「そんなことでいいのかな」と思った記憶があります。ですが、防衛省で13年間勤務した今、そんな「あたりまえ」の能力が一番大事だと感じています。地方協力局の業務は、政府内で完結せず、自治体や在日米軍を含め様々なアクターが存在する中で、落とし所を探っていく、極めて難しいハンドリングが求められるものです。それぞれのアクターと円滑に調整しつつ、国民目線からなすべきことを進める「あたりまえ」の視点を忘れずに日々の仕事に取り組んでいます。

Personnel Introduction



地域の理解なくして
国家の安全は成り立たない



地方協力局 総務課
総括班防衛部員
2016年入省 技術系(施設系)

日米同盟を強化する 複数のプロジェクトを推進

私が所属している総務課の仕事は、自衛隊・米軍の活動や関連する事業を滞りなく進めるため、地元自治体や米国との調整が円滑に進むよう、防衛省内全体の調整を行うことです。担当している地域である九州防衛局管内には、陸自オスプレイの配備予定地である佐賀駐屯地(仮称)の新設や、馬毛島における施設整備、米海軍佐世保基地における前畑弾薬庫移設事業など、防衛省として島嶼防衛力の強化や日米同盟を強化する上で欠かせない重要なプロジェクトが複数進んでいます。時に難しい調整に直面する場面もありますが、様々な関係者を巻き込みつつ、国家の安全という目標達成のため、防衛省が一丸となって取り組んでいます。

地域との調整に同じ答えはない より良い答えを導くために尽力する

施設整備や共同訓練など、自衛隊・米軍が活動する上では地元の協力は必要不可欠ですが、同時に、この活動は時に地元自治体・地域住民の生活に直結する影響を与えます。例えば航空機が飛行すれば飛行場周辺には騒音が生じ、海上において訓練を行えばそこでの漁業は制限されます。そのため、新たな部隊の配備や訓練の実施にあたっては、地元に対して丁寧に説明を行うとともに、必要に応じて防音工事や漁業補償を行うなど、地元の協力を得るために最大限の努力を行う必要があります。地元との調整は一つとして同じ調整はありませんが、関係する職員と協力して、より良い答えを見出せるよう日々の業務にあたっています。

MISSION

06

戦略的な装備政策の展開

防衛生産・技術基盤の強化、新たな外交ツールとしての諸外国との防衛装備・技術協力の推進や、装備調達最適化など、自由な発想と多角的な視野で装備政策を企画立案し、実施します。

防衛生産基盤の強化

- 防衛事業の魅力化
- 企業の競争力・技術力の維持・強化
- 強靱なサプライチェーンの構築

防衛技術基盤の強化

- 集中的な研究開発投資
- 研究開発の高速化
- 革新的な民生先端技術の発掘・育成・取込

諸外国との防衛装備・技術協力

- 防衛装備移転の推進
- 国際共同研究開発

装備調達の最適化

- プロジェクト管理
- 取得制度の見直し

Personnel Introduction



防衛装備庁 プロジェクト管理部事業計画官付
企画室維持整備企画班長
2011年入省 技術系（装備系）



「**防衛装備とその製造を担う防衛産業は
国家の防衛力に直結する**

従来とは異なる自由な発想と 多角的な戦略で装備政策を推進

自衛隊の任務遂行に不可欠な防衛装備品、その研究、開発、生産、維持・整備等を担う防衛産業はいわば防衛力そのもの。それらは我が国の平和と安全の確保になくてはならないもの。

こうした考えの下、装備政策は、安全保障に直結する重要政策の一つとして、防衛生産基盤強化法をはじめとする防衛生産・技術基盤の強化、望ましい安全保障環境の創出等のための政策ツールとしての諸外国との防衛装備・技術協力の推進、防衛装備品の効率的な取得など、大きく広がり続けています。

防衛力の抜本的強化を早期に実現するためには、力強く持続可能な防衛産業の構築が不可欠であり、従来とは異なる自由な発想や多角的・戦略的な視点が強く求められています。

防衛装備から国の平和と安全に 貢献することがやりがい

プロジェクト管理部事業計画官付では、防衛装備品のプロジェクト管理の方針・改善や、防衛装備品が最大限可動する体制の確保などに取り組んでいます。防衛装備品は必要な時期までに取得し、それが可動しなければ防衛力を支えることはできません。プロジェクト管理とは、防衛装備品のライフサイクル全体の最適化に向け、コストやスケジュール、パフォーマンス等を管理することです。それがより効率的かつ効果的になるようの方針等の企画に取り組んでいます。また、近年の防衛装備品の高度化・複雑化に伴い、維持整備費の所要が大幅に増加している中、防衛装備品の可動数向上に向け、自衛隊の維持整備費の在り方や防衛装備品ごとの対応策の検討等に取り組んでいます。これらの取組は、自衛隊の任務や防衛力に直結し、我が国の平和と安全に貢献するため、大きなやりがいやモチベーションをもって取り組んでいます。

Personnel Introduction

「**“技術で我が国を守り抜く” ために
様々な職員が議論を交わす環境**



防衛装備庁 技術戦略部技術戦略課
総括班係員
2022年入省 技術系（装備系）

未来の防衛装備品につながる 技術を育成するミッション

技術戦略課は、「技術で我が国を守り抜く」ために防衛装備庁で行う研究方針の企画立案などの業務を担う部署です。課内には研究職をメインとして、事務系職員、自衛官、他省庁・研究機関からの出向者など様々な職種職員の職員が集まっていて、時には大学の研究室のように技術に関するディスカッションがどこからともなく聞こえてくる環境で、日々賑やかに仕事をしています。

在学時に自衛隊の見学ツアーに参加し、人的基盤の重要性と同時に優れた防衛装備品が必要不可欠であることを感じ防衛省を志した私としては、未来の防衛装備品につながり得る技術の育成を目指している技術戦略課に在籍していることは非常に刺激的であると感じています。

防衛装備の研究開発の取り組みを 世の中にアピール

私は総括班の一員として、いわゆる「窓口業務」と呼ばれる国会に関する業務をはじめとする部内に届く様々な業務が滞りなく進むよう交通整理を行うとともに、2年目職員ながら、防衛装備庁の研究開発への取り組みを世の中にアピールするチームに属し、主に広報動画の制作に携わっています。（動画は、防衛装備庁公式YouTubeにアップロードしているので、是非ご覧ください！）

毎日直面する様々な業務は共通して関係各所の合意を取る「調整」が最も重要なポイントであり、時には困難を感じることもあります。しかし、だからこそ大なり小なり案件が形になった時の達成感はひとしおであり、そのやりがいを胸に日々励んでいます。

アフガニスタン、スーダン、 イスラエル——。 戦時の在外邦人等 輸送オペレーションの成功を 支えたものは何か。

2023年4月、アフリカ北東部のスーダン共和国で国軍と即応支援部隊による激しい武力衝突が発生。首都ハルツームを中心に、在留邦人の自力での脱出が難しくなる中、外務省から依頼を受けた防衛省・自衛隊は輸送機を現地に派遣し、在留邦人とその家族計45名をポートスーダンからジブチまで無事に輸送した。「薄氷を踏むようだった」とも評されるこのオペレーションの振り返りを通じて、防衛省・自衛隊の在外邦人等輸送（TJNO=Transportation of Japanese Nationals Overseas）について語る。

大臣官房 秘書課
防衛大臣政務官秘書官
(当時：統合幕僚監部 首席参事官付国外運用班長)

2014年入省 事務系
職員 D



——スーダン邦人輸送オペレーションはわずか10日間で完了しました。成功の要因とは何だったのでしょうか。

職員D: 日本政府の司令塔である官邸、外務省をはじめとする関係省庁、さらに防衛省の中でも現場で輸送機を運用する部隊とそれを統制する司令部としての統合幕僚監部、そして我々“シビリアン”と呼ばれる各部署の事務官が一体となり、邦人輸送という大きな目的のために連携して動いたことが一番の要因だったと思います。作戦における不確定要素を「戦場の霧」と呼びますが、今回、その霧は非常に濃かったように思います。その中でも関係者が最大限によく情報共有し、同じ目線で突き進むことができました。

職員E: 危機に直面した国民の生命を救うという、非常にインパクトの大きなオペレーションでし

たね。ポイントの一つが「迅速性」であったと思います。外務省と連携を取り、自衛隊唯一の海外拠点が置かれているジブチへと速やかに自衛隊機を派遣することができました。今回は2021年のアフガニスタンの邦人輸送オペレーションの経験を活かし、他国のオペレーションとほぼ同じタイミングで実行できたと思います。

職員D: 自衛隊の海外派遣には、迅速性の一方で正当性も求められます。国家として実力組織である自衛隊を海外へ派遣する根拠について前もって検討し、慎重さを保ちつつ、最も適切なタイミングで自衛隊機を現地へ飛ばすことができました。先を見据えた早めの準備が重要だという認識は、関係者皆の頭の中にもあったと思います。

職員E: 前もっての準備ということで象徴的なエピソードとしては、領空通過許可の取得がありました。空港への着陸を行わずに他国の領空を通過する際にも、その国の許可が必要です。通常であれば許可を得るには相応の期間が必要となるのですが、今回は外務省が頑張って各国に交渉してくれたおかげで、すぐに自衛隊機を出発させることができました。このように組織の違いを超えて関係者が一致団結して取り組んでいく上で、Dさんたち事務官の方々は非常に汗をかいてくださいました。



——スーダンのオペレーションで最も困難だったことは何でしたか。

職員D: 邦人をどこでどのようにピックアップするかという点は、まさに困難を極めました。

職員E: 各国の大使館が並ぶ首都で戦闘が始まり、しかも戦況は流動的でしたので、その点は非常に頭が痛かったです。外務省とも何度も検討を重ねる中、国連がスーダン北部のポートスーダンへの陸路移動を計画しているという情報をキャッチしたことで、我々も最終的にポートスーダン空港で邦人をピックアップすることに決めました。次に頭を悩ませたのが、どのタイミングでピックアップするかという点でした。首都で邦人を載せたクルマは約800kmもの距離を移動しなくてはなりません。実際、途中の道のりでは武力組織による検問やバンクといったアクシデント、運転手の安全確保のための休憩など、様々な状況が待ち構えていました。それらの状況を把握しながら自衛隊機派遣のタイミングを計算したわけです。

職員D: 情報収集については、外交ルートはもちろんのこと、多様なルートを通じて行われました。当然玉石混濁で、Aという情報の直後に正反対のBという情報が飛び込んでくるような状態だったのです。その中で我々は精査を繰り返

し、正しい情報を選別していきました。また、私の班のひとりも調整作業のために現地へ飛びました。いくら人命に関わるオペレーションと言っても自衛隊機が勝手に飛んで、勝手に着陸するわけにはいきません。現地各機関との調整は必要です。そうした任を果たすために同僚も現地に赴いたわけですが、彼は「万一何かあったら後は頼む」と家族に託していったそうで、それほどの覚悟と志でオペレーションに取り組んだ仲間がいることを誇らしく思います。

職員E: 結果として邦人を載せた車両と自衛隊機はタイミングよく合流できました。邦人の中には、自衛隊機に描かれた日の丸を見た瞬間に涙が出た方も多かったそうです。ある男の子は自衛隊機を「カッコいいな」と言いながら涙しており、隊員が理由を聞いたら「安心したから」と答えたとのことでした。やはり皆さんの中には言葉では表しきれない不安があったのでしょうか。自衛隊機を見て「本当に助けに来てくれたんだ」という思いがあふれたのだと思います。

職員D: 邦人を載せた自衛隊機がポートスーダン空港を離陸した際は、やるべきことを成し遂げたという達成感がありました。しかし、安堵することはなかったですね。残された邦人がいないかの確認など、まだまだやるべきことがあるという感覚でした。

職員E: 離陸の瞬間は、居合わせた関係者から自然と拍手が起きました。邦人が無事にジブチに到着し、健康状態に問題もないと確認できたときに、一段落ついたという思いでした。ただ、Dさん同様、私も次に取り組むべきことは何だろうと頭を切り替えました。

——自衛官と事務官のあり方について、どのようにお考えですか。

職員E: Dさんの同僚が現地へ飛んだというお話がありましたが、それに限らず、あらゆる場面で自衛官と事務官は思いを一つにしてオペレーションに取り組んでいます。

職員D: まさにUC (Uniform自衛官、Civilian事務官) 一体化ですね。自衛官は軍事的合理性を追求し、日本の中で最も軍事的知見を保持していなくてはなりません。事務官はそれらを外交や経済とも吻合させ、政策的妥当性に配慮しながら政治が決断を下すための選択肢を準備することが求められています。

職員E: 軍事的思考や用語は、そのままでは政府内で理解されにくいものです。我々自衛官が細かな情報を盛り込んだペーパーをもとに、エッセンスをわかりやすくまとめて政府に伝える、いわば翻訳作業をしてくれるのが事務官です。いかに現場の意向が正しく伝わるかが極めて重要

ですので、事務官の役割は非常に重いと考えています。

職員D: そうしたUC一体化がスーダン邦人輸送オペレーションで強化され、さらに次のイスラエル邦人輸送のオペレーションでも発揮されましたね。

職員E: イスラエル邦人等輸送は、ハマスとイスラエルの軍事衝突を受け、外務省の要請によって2023年10月に行われました。これに関しても外務省との連携に加え、現地邦人等の意向についての情報収集など、事務官の果たした役割は大きかったと思います。

職員D: 国際情勢が不安定化していく中、今後も邦人等輸送が必要になる状況は十分に起こりうると思います。民間機が飛べないような状況になっても、防衛省・自衛隊は国家の「最後の砦」として国民を助けに飛ばなくてはなりません。国家の意思を成し遂げるための実力組織として、そのための準備にはさらに力を入れていく必要があると考えています。

職員E: 同感です。もちろんそのような事態が起きないに越したことはないのですが、残念ながら現在の国際情勢がますます不透明さを増していくことは間違いないでしょう。入省を希望される皆さんには何よりも郷土である日本を愛する心を持ち、幅広い視点で国際社会や安全保障を俯瞰しながら、自衛官と事務官が一体となった国家防衛に貢献していただきたいと思っています。



統合幕僚監部 運用部
運用2課長 (1等陸佐)
1998年入省 陸上自衛隊
職員 E

変わり続ける世界で、 変わることをない使命を胸に。

防衛省地方協力局長

大和 太郎

冷戦の終焉という国際社会の大転換を迎えた1990年に入庁（当時）し、約30年間にわたり、日本の安全保障政策の中枢を担ってきた大和太郎地方協力局長から、防衛省ひいては日本の平和を背負って立つことになる皆さんへ、熱いメッセージを送る。



安全保障環境の変化について、 どのようにお考えでしょうか。

私は1990年に当時の防衛庁に入庁しました。もちろん、それ以来、世界は変わりました。ですが、「変わらない」こともあります。それは、いささが逆説的ですが、我が国を取り巻く世界にあっては常に変化が起きているということです。冷戦終結後の1990年代と2000年代においては、米国は「唯一の超大国」であり、その時代を「単極時代（unipolar moment）」と捉える見方が支配的でした。今でも米国は、経済力、軍事力、国際政治における影響力などに関して他を圧する存在です。ただ、中国の台頭や「rise

of the rest」により、国際政治・経済における相対的な力関係は大きく変化しました。そのため今の世界がかつてのような「単極」の時代にあると見る向きは多くないと思います。もちろん「変わらないこと」もあります。例えば、日本が市民的自由の保障、法の支配、自由で公平な選挙、権力の分立といった価値を奉ずる国であり続けていること、また、こうした普遍的価値を共有する国々との緊密な関係を維持・強化していることです。さらに、日本がユーラシア大陸の東の端にある列島の上に築かれた国家である、ということも変わりません。人為的に変えることのできないこの地理的条件は、我が国の安全保障を考える上での中心的な要素の一つです。

これまで日米同盟に関する仕事も 多く担当されていますが、 世界における日米同盟の意義、 変化については どうお考えでしょうか。

自由世界のうち、いわゆる「大西洋世界」の国々——米国とヨーロッパ諸国——は、いずれもJudeo-Christian（ユダヤ教とキリスト教の両方に関連しているさま）の文化と伝統を受け継ぐ国々です。大西洋世界とは大きく異なる歴史を経てきた東アジアの自由主義国である日本が、大西洋世界の最強国である米国と同盟関係を結び、さらに、最近にあっては欧州諸国との関係を強化していることは、我が国自身の安全保障はもとより、自由世界の結束を保ち、そのチカラ（hard, soft, sharp powerと色々ありますね）を強め、そして、市民的自由の保障などの普遍的な価値を守っていくことに大きく寄与するものだと思っています。

日米同盟の深化において、 今後防衛省職員にどういったことが 期待されるのでしょうか。

日米安全保障条約に基づく日米同盟は、さまざまな「コンテンツ」が詰まったものです。この「コンテンツ」は実に多様です。具体的には、基本的な戦略についての協議、拡大抑止についての対話、情報面の協力、日米同盟を起点とする友好国との防衛協力、様々な緊急事態に備えた共同の作戦計画づくり、日米共同の訓練や演習、日米共同のISR（情報収集・警戒監視・偵察）活動、重要な装備品の共同研究・開発などなど、とても多岐にわたるアイテムがあります。この30年間に起こっているのは、これらのアイテムが増え、また、それぞれが豊かになり続けている、ということです。例えば日本・米国・オーストラリアの共同演習などは「日米同盟を起点とする友好国との防衛協力」の一つの例ですが、これは30年前には存在しなかったものです。一方で日米共同訓練・演習は30年前にもありました。しかし、指揮所演習にしても実動演習にしても、今、その内容は、往時よりもはるかに高度で複雑なものになっています。

こうした「コンテンツ」の充実のため、安全保障を専門とする防衛省職員の役割は、かつてないほど大きくなっています。世界情勢を俯瞰しながら、制服自衛官の皆さんや外務省などの関係省庁と協力して、日米同盟のこれらコンテンツをさらに豊かなものにしていくことが期待されます。

特に印象深かった仕事は 何でしょうか。また、長く携わっている インテリジェンスについて、 防衛省ならではの醍醐味を 教えてください。

私にとっては、入省してからこれまで関わった仕事は全てが面白く、印象的でした。行政官の仕事は、国家としての目標（ends）を立て、その目標を達成するために何をやるべきか（means）、また、どうやってやるべきか（ways）を考え、そして、実際にやるべきことを実行する（do/act）というものです。霞が関で行政官として働く魅力の源泉は、「実務家」として、「何をすべきか」についてアイディアを出すだけにとどまらず、「ポリシーを実行する」というところにあると思います。防衛省での仕事が皆さんの情熱を傾けるに値するものだということ、また、インテリジェンス関係の仕事がとても魅力的なものであることには太鼓判を押せます。ただ、インテリジェンスについては、事柄の性質上、ここで具体的なことをお話しできないのはツライところです。一つ言えるのは、皆さんが将来、防衛省で働くことになれば、きっと「防衛省・自衛隊の情報部門はこんなスゴイ能力を備えているのか」「情報面の協力も、日米同盟の重要コンテンツなのだなあ」「国によって、情報の得意分野はずいぶん違うものだなあ」と感じるはずということです。ここから先は、防衛省に入ってからのお楽しみとさせていただきます。

未来の防衛省職員に メッセージをお願いします。

どんな仕事であっても、職業人には「学び続けるチカラ」がとても大事だと思います。防衛省の文官も例外ではありません。将来にわたる我が国の安全保障を考える際には、いろい

ろな「歴史」——日本史、世界史、戦史など——を学び顧みることが必要です。もちろん、過去についてどんなに学んでも、未来がどうなるかを正確に言い当てることはできないでしょう。でも、マーク・トウェインの「history doesn't repeat itself. But it rhymes」という言葉もあります。「これからどうすべきか」を考える手がかりは、歴史を学ぶことで得られるはずです。ほかの「学び」としては、例えば微分積分やベクトル・行列など高校時代に勉強した数学を勉強し直すと、「人工知能（AI）」や「機械学習」についてより深い理解が得られるようになります。そうすれば、こうした「世界を変える」チカラを持ったdisruptive technologiesが、国の防衛にどんな意味を持つかについて、より深く考えることができるはずです。ぜひ「学び続けるチカラ」を大切に、多くの方が防衛省の門を叩いてくださるようお願いいたします。

大和局長の経歴

1990年4月	入庁
1995年8月	米・タフツ大学 フレッチャースクール留学
1997年8月	防衛局防衛政策課部長
1999年9月	防衛局計画課班長
2001年7月	運用局運用企画課総括班長
2003年4月	内閣官房内閣情報調査室
2004年8月	防衛局調査課部長
2008年8月	大臣官房秘書課人事企画室長
2009年8月	防衛政策局防衛政策課 戦略企画室長
2012年8月	情報本部分析部長
2013年7月	防衛政策局調査課長
2015年10月	防衛政策局日米防衛協力課長
2017年8月	防衛政策局防衛政策課長
2019年1月	内閣府国際平和協力本部 事務局次長
2020年8月	防衛政策局次長
2022年7月	統合幕僚監部総括官
2023年7月	地方協力局長（現職）

施設系技官の役割

DEFENSE
TECHNICAL
OFFICIAL

平和という 「究極のインフラ（社会基盤）」 を整備する

駐屯地・港湾・飛行場等の
「防衛施設」は、自衛隊の活動基盤であり、
国民の当たり前の毎日を明日につなぐ
「最後の砦」として必須です。

施設系技官は、土木・建築・機械・電気などの
工学系出身の職員が、技術的知見を活かして、
強靱な防衛施設の確実な整備（建設）や安定的な
運用に必要な政策の企画・立案を行っています。

CAREER PATH

課長・室長
(本省／地方防衛局部長)
※管理職として、より責任のある立場へ

部員
(本省／地方防衛局)
※政策の企画立案の中心

係員
(地方防衛局)
※防衛施設の建設工事に係る専門的技術を涵養

係員
(本省)
※政策立案や危機管理に関する行政実務を経験

施設系職員のキャリアパス

入省1年目は、本省内部部局等において行政官として実務を経験します。2年目以降、地方防衛局等の勤務を交えながら専門的技術力と行政感覚をバランス良く培います。その後、他省庁の課長補佐に相当する「防衛部員」となり、自らのイニシアチブで政策の企画・立案を行うこととなります。また、留学や出向はもちろん、在外公館勤務など多様な経験を積むことが可能です。

防衛施設の整備（建設）



宮古島駐屯地
駐屯地の新設



実爆実験
抗たん性の向上

周辺地域との調和



自治体への防衛政策の説明

在日米軍の再編



ローワー・プラザ地区緑地公園（イメージ）
地元負担の軽減

装備系技官の役割

DEFENSE
TECHNICAL
OFFICIAL

戦略的な 「装備政策」を 展開する

装備系技官は、技術的な知見を背景に、
装備品に係る各種政策の
企画立案などを担っています。
様々な知識を柔軟に活用して、
装備品の取得、防衛生産・技術基盤の
維持・強化、契約制度の最適化、
国際装備協力などに携わります。

CAREER PATH

課長・室長
(本省／防衛装備庁)
※管理職として、より責任のある立場へ

部員
(本省／防衛装備庁)
※政策の企画立案の中心

係員
(防衛装備庁)
※装備品に関する政策や実務を担当

係員
(本省)
※政策立案や危機管理に関する行政実務を経験

装備系職員のキャリアパス

入省1年目は、本省内部部局等において行政官として実務を経験します。2年目以降、防衛装備庁等において装備品に関する政策や専門的な知識を活用する実務経験を積みながら行政感覚を養います。その後、他省庁の課長補佐に相当する「防衛部員」となります。海外・国内留学や出向など多様な経験を積むことが可能です。

装備品の取得



装備品の調達、プロジェクト管理 等

防衛生産・技術基盤の維持・強化



防衛事業の魅力化、
強靱なサプライチェーンの構築 等

国際装備協力



防衛装備移転の推進、国際共同研究開発 等

施設系技官の紹介

DEFENSE
TECHNICAL
OFFICIAL

01



長期的な視点で 自衛隊施設の強靱化に取り組み 我が国の平和と安全に貢献する

整備計画局 施設計画課
施設政策室長
1998年度入省 技術系（施設系）
専門：土木

“司令塔”として 膨大な自衛隊施設の強靱化を推進

我が国を取り巻く安全保障環境が厳しさを増す一方、自衛隊の活動の基盤となる全国の自衛隊施設は老朽化が著しく、その強靱化は喫緊の課題となっています。こうしたことから施設計画課では、2022年末に閣議決定された安全保障関連3文書のうちの一つ『防衛力整備計画』に基づき、約23,000棟に及ぶ自衛隊施設の強靱化に関する施策を推進しています。これら業務の“司令塔”を務めているのが、私の所属する施設政策室です。一言で自衛隊施設といっても、その種類・用途は飛行場や港湾施設、格納庫や火薬庫、隊舎、教育・訓練施設さらには発電施設等のユーティリティ施設など、多岐にわたります。その強靱化に向けては関係省庁や自治体をはじめとする多様な関係者の理解と協力や民間企業が有する技術力の活用が必要不可欠です。また、事業を進めていくにあたり施設が所在する地元経済にも十分配慮していくことも重要です。こうした影響力の大きな仕事に携わっていることはやりがいの一つであり、各分野の方々とのつながりを通じて自分も成長させていただいている実感が得られます。



昨今の安全保障環境の変化を踏まえ、これまでにない規模の自衛隊施設の整備を短期間で集中的に進める必要があることから、施設政策室では前例にとらわれず、柔軟な発想で様々な施策の企画・立案を行っています。

専門性を活かし、 相手の立場に立って理解を求める

大学で土木工学を学んだ私は、将来にわたって人々の役に立つ大規模な構造物の建設に携わる仕事に就きたいという思いから、防衛省施設系技官の道を選びました。防衛施設の所在地は全国津々浦々にわたり、所在する地域によってその役割や特性も大きく異なります。一方で騒音や周辺環境への影響観点から、必ずしも地域住民の方に喜ばれる施設ではないという現実もあります。そのような中、いかに地域の方々の理解と協力を得ていくか、環境を保護しつつ事業を進めていくためには何をすべきかを考えることも、防衛施設の整備を進めるに当たっての大きなテーマです。様々な関係者と調整を進める中では先方と同じ目線で技術的な内容を分かりやすくお伝えする状況もあり、“通訳”のような存在として、土木工学を学んだ専門性を発揮できていると感じます。これも施設系技官に課せられた重要な使命であることは間違いありません。防衛省が推進するプロジェクトの多くは短期間で目に見える成果が出るものではありません。ほとんどが我が国の10年後、20年後、さらにはもっと先の安全保障の基盤づくりを担うものです。好奇心旺盛で世界情勢の変化に対して敏感であり、理工学系の専門性を発揮しながら日本の平和と安全に貢献したいという志をお持ちの皆さんの入省を、心より期待しています。



国を守る すべての汗は その志を貫くために

整備計画局 提供施設計画官付
総括班長
2006年度入省 技術系（施設系）
専門：電気

一つの街を作り上げるほどのスケール感

私は「国を守る」という、国家としてのゆるぎないミッションの実現に技官として貢献したいと考え、防衛省を志しました。防衛技官は、戦闘機や大型輸送機が離着陸できる飛行場やそれらの格納庫を整備したり、無人島に新しい基地を築いたり、防衛省ならではのスケールの大きな事業に携われることが大きな魅力です。その一つ一つが我が国の安全・安心の実現につながっています。現在は、整備計画局提供施設計画官付において、在日米軍が使用する施設の建設に関する総合調整を行っています。日本を取り巻く安全保障環境が厳しさを増す中、在日米軍の存在はこれまで以上に重要となっており、在日米軍の安定的なプレゼンスを支え、日米同盟の抑止力と対処力を高めることは喫緊の課題となっています。そのための取り組みの一つとして、在日米軍の即応性と抗たん性を高めるため、飛行場施設や訓練施設の整備など、在日米軍の活動基盤となる施設の建設を進めています。私は課の総括班長として、全体を見渡しながら、それぞれの担当者が進め



ている業務を幅広い視点で実務的にまとめつつ、大臣への説明や他省庁との調整、国会議員やメディアへの説明から課の人事まで、「事業の推進」とそれを実現するための「チームづくり」を担っています。

変わらぬ志で、政策を前に進める

在日米軍施設の建設は日米同盟の抑止力と対処力を強化するだけでなく、施設の整理・統合によって地元の負担を軽減するという側面もあります。返還された土地では、街づくりが行われたり、世界自然遺産に登録されたりするなど、有効な跡地利用が進められています。これまで、在日米軍施設の一部を早期に返還するための日米交渉や、沖縄県の北部訓練場の過半の返還の実現、日本の海兵隊の一部をグアムに移転する事業などに携わり、現在は沖縄の普天間飛行場の全面返還に向けて取り組んでいます。いずれも簡単な事業ではなく、たくさんの困難に直面してきました。大変だと思ふことはありますが、つらいと感じたことは一度もありません。なぜなら、どんな苦労であっても、そのすべてが国の安全保障につながっているという強い思いがあるからです。この“軸”はこれからも決してぶれることがないでしょう。防衛省の目の前には、常に「前例踏襲」では解決できない課題がたくさんあります。これに対し、自衛官、事務官、技官など、様々なバックグラウンドを持った職員が、「国を守る」という志のもとで思いを一つにし、切磋琢磨しながら政策を確実に前に進めていく。これが防衛省という組織なのです。

施設系技官の紹介 | DEFENSE TECHNICAL OFFICIAL 02



「地元の人々の想いに応え 感謝の気持ちと共に 移設作業を進める」

地方協力局 沖縄協力課
再編推進室米軍再編班部員
2009 年度入省 技術系（施設系）
専門：土木

現在私は、沖縄県那覇市に所在する在日米軍施設の那覇港湾施設の全面返還に向けて、代替施設を同県浦添市の沖合に移設するための地元調整及び工事の事務を統括しています。那覇港湾施設は沖縄県内でも人口が集中する那覇市内に所在し、地元から長年返還が望まれている米軍施設です。移設先が民港の「那覇港」内での移設となるため様々な関係先との調整は容易ではありませんが、早期の返還を望む地元の声にお応えすべく、環境にも配慮しながら工事等を着実に進めていきたいと考えています。返還後の跡地は那覇空港にも近く好立地であることから様々な利活用が期待されており、米軍施設の返還跡地のモデルケースになればと思います。施設系技官として、このような移設事業を遂行する上で私が重要だと感じているのが、移設に必要な法令の行政手続きについての知識です。移設事業を進めるためには、様々な調査や多種多様な業種の工事が必要になります。那覇港湾施設の移設先は米軍施設ではありませんが、米軍施設であっても日本国内法令は、もちろん適用され、国内法令に従い、必要な手続き

を行わなければ、工事を進めることが出来ません。学生時代は、各専門分野について勉強されると思いますが、専門分野の知識は当然備えた上で、こうした知識を合わせることで、移設事業に何が必要で、どれだけの時間を要するのかを見積り、それを遂行する能力が問われます。私は、学生時代の専門知識と防衛省の事業で学んだ知識を活かしながら、施設の整備に携われることに、防衛省の施設系技官ならではのやりがいを感じています。



「すべての業務は 国を守るために その実感こそやりがい」

整備計画局 施設技術管理官付
建設技術企画班調整係長
2017 年入省 技術系（施設系）
専門：建築

学生時代を長野県で過ごした私は、2014年の御嶽山噴火の際、降りしきる灰の中を登山者の救出に向かう自衛隊車両とすれ違いました。私もその力になりたいという思いがわき、建築という専攻分野を活かして自衛隊を支えることができる点に惹かれて施設系技官として防衛省に入省することを決意しました。私の職務は防衛施設に関する技術的内容についての意見のとりまとめや国会の調整業務、会計検査対応等で、現在取り組んでいるのが基準の改正作業です。これまで私は北関東防衛局、九州防衛局で監督官として基準に基づいて業務を行いました。その基準を、使う側からつくる側へと立場が変わったこととなります。地方防衛局時代はこれら基準をどのように作成するかに興味があり、いつかはつくる立場になってみたいと思っていたので、やりがいをもって取り組んでいます。今は、わかりやすく、正確な文章を作成することの困難さについて日々頭を悩ませています。もちろんその根底には、自分の仕事が自衛隊の活動を支え、我が国の平和を守ることに



つながっているという意識があります。どのような業務を担当しても、こうした思いに立ち返ることのできる点こそ、防衛省で働く一番の魅力ではないでしょうか。幅広い業務に就くことのできる防衛省では、自分の強みを活かすだけでなく、新しい知識や技術を身につけることができます。そこから得られる成長の実感も、働く喜びにつながっています。



「安全保障に携わることが 歴史的文化財を守り 受け継いでいくことにつながる」

防衛政策局 日米防衛協力課
総括班係員
2023 年入省 技術系（施設系）
専門：建築

学生時代に日本の寺社建築を研究していた私は、安全保障に携わること文化財を守り、受け継いでいくことにつながると考え、防衛省を志望することにしました。かつての比叡山焼き討ちのような、歴史的価値のあるものに対する破壊活動が行われるような争いを二度と招いてはならないと思ったのです。また一方で、防衛省・自衛隊にも戦前から受け継がれている建物が多くあり、その価値を守りながら整備していくことにも興味を抱きました。1年目の現在は日米での防衛協力に係る連絡調整業務を行っています。行政の仕事というのはロジックで割り切れるものばかりでなく、時に曖昧さを感じることもあります。そうした点が理系出身の私にとって戸惑いにつながったことは否定できませんが、経験を重ねるにつれ、一つ一つの判断の基準を深く考えて腹落ちさせることができるようになりました。戸惑いがあった分、理解ができたときの喜びは大きく、仕事に対するやりがいを感じます。今では自分なりに理解した判断基準をノートに書き溜めてあり、いずれ後輩のために整理して残しておきたいと考えています。また、現在所



属している課では毎月確実に有給休暇を取得するようにしており、充実したワークライフバランスの実現に対して積極的に取り組んでいるところが魅力的です。今後、防衛省では様々な施設の再編が進められていきますが、ただ古いものを壊すのではなく、残すべき部分は残しながら再編に携わっていきたいと考えています。それが歴史的建造物の研究に携わってきた私の使命だと受け止めています。



CROSS
X
TALK地方勤務紹介
対談地方勤務、
その使命とやりがいとは。地方で支える
日本の未来。
地方で楽しむ
日々の生活。

現場近くで、防衛政策を形にしてい

職員F: 地方勤務があるということは入省前から聞いていました。私は山梨県の出身で、知らない土地で暮らすことがシンプルに楽しみでした。

職員G: 現在、Fさんは南九州地域を担当する熊本防衛支局勤務ですね。

職員F: ええ、2年目になります。Gさんは現在本省勤務ですが、これまでに二度の地方勤務を経験されたそうですね。

職員G: 最初が南関東防衛局で横浜に勤務しました。私は出身が神奈川県ですので、このときは地方勤務という実感はなかったです。その後、二度目の地方勤務として沖縄防衛局に勤務しました。

職員F: 本省と地方防衛局では、役割が明確に分かれていますね。

職員G: 本省においては、政策の企画・立案、予算要求、基準の策定等、中央レベルでの調整や、各防衛政策を実現するための環境づくりを行います。それに対して地方防衛局においては、全国に所在する自衛隊施設や米軍施設に関する建設工事や地元との調整等、施設整備や地元調整を通じて防衛政策を目に見える形につくり上げていきます。

職員F: 私はいつも川の流れをイメージしています。上流で川全体の流れる方向を決めるのが本省、実際にちゃんと流れていくように下流で整備するのが地方防衛局という感じです。

職員G: わかりやすいたとえですね。

職員F: 私の場合、本省で担当していた事業を、現在は熊本防衛支局で引き続き担当しています。川の上流と下流では見える景色が違うよう

に、本省と地方防衛局では同じ案件でも見え方が違うわけです。本省では想定していなかった出来事が起きることも珍しくありません。その解決策を考える際は、地方防衛局ならではの現場の視点を大切にしつつ、そもそも本省が何を意図しているのかという視点も忘れないようにしています。工程表とにらめっこしながら、解決策を考えて調整する毎日です。

職員G: そうした多様な視点を身につけられることが、地方勤務の大きな狙いですね。

職員F: 現場との距離の近さは地方勤務ならではの醍醐味で、施工事業者の声や施設の利用者である自衛隊員の声がダイレクトに聞こえてきます。

職員G: 私が勤務していた沖縄では、台風で工事がストップしてしまうことがよくありました。こうしたことも、地方勤務ならではの体験です。

職員F: Gさんは沖縄でどのような案件を担当されていたのですか。

職員G: 主に米軍基地の集約に伴う施設の再編に携わりました。隊舎、局舎といった自衛隊施設にもある施設のほか、学校や映画館、野球場など、実に多様な施設がありました。実際に使用される施設をつくり上げていくのが現場の役目ですから、ものづくりの醍醐味はかなりあります。例えば家族住宅だと、引き渡し



後に近くを通りかかると明かりが灯っているのが見え、あの中で人が暮らしているんだなど実感できます。

職員F: 私が担当しているのは鹿児島県にある無人島に新しく基地をつくるという壮大なプロジェクトで、インフラの整備から行わなくてはなりません。一つの基地をつくるということは、一つの街をつくるということです。基地の中では自衛隊員が一般の方と同じように寝て起きて、ご飯を食べて、仕事をしています。学生の皆さんは防衛施設と聞くと格納庫や弾薬庫などをイメージされるかもしれませんが、実は生活のための施設もかなりの数があります。そうした施設づくりを通じて、国を守る自衛隊員の生活と命を守ることが私たちの使命です。この実感が一番のやりがいですね。

新しい「ふるさと」で暮らす感覚で

職員G: 地方勤務といっても防衛局が置かれているのは都市部ですので、生活面での不便さはほとんどありません。大きなスーパーやコンビニをはじめ、生活に必要な施設はだいたいそろっています。

職員F: 私は熊本市内に民間マンションを借りて暮らしています。とても広い間取りなのに家

賃が都内と比べて格安なのありがたいです。車は持っていないのですが、普段の生活は徒歩圏内で用が済みますので、特に不便さは感じていません。

職員G: 私が沖縄で暮らしていたのは、ビーチまで徒歩3分のマンションでした。息子と一緒に毎週のようにビーチへ行って遊んだのは、いい思い出です。

職員F: うらやましい！

職員G: 写真やビデオをたくさん撮ったので、今もよく見返しています。息子は最近まで「いつ沖縄に帰るの」と口にしており、沖縄が地元と思っているのかもしれませんが、知らない土地で、人間関係がまったくないことが最初は気がかりでしたが、公園の散歩をしていたら顔見知りができ、自然と地元のコミュニティに溶け込めました。

職員F: 地方勤務の楽しみの一つが「食」ですね。海の幸も山の幸も豊富で、新鮮な魚介類がスーパーで当たり前のように並べられています。熊本は自然も豊かで、日本でも有数の雄大な景色が楽しめますし、海側の眺めも素敵です。その土地ならではの魅力に触れるにつれ、ふるさどが増えていく感じです。

熱い使命感は、
どこにいても変わらない

職員G: Fさんが防衛省を志望した理由は何でしたか。

職員F: 大学で学んだ工学的な知識を使って「国を守る」という大きな仕事がしたかったからです。

職員G: 私も同じで、工学系の知識を活かして、人をハッピーにする仕事に携わりたいと思いました。それを実現できる仕事は様々ありますが、防衛省施設系技官の仕事は、我が国の平和と安全を守る自衛隊の運用基盤である施設の整備を担う唯一の仕事であり、当たり前の日常の土台を一番深いところで支えるスケールの大きさが魅力です。直接ものづくりをするわけではありませんが、目に見えない「安全」というものをつくる仕事なのは間違いありません。

職員F: そうしたプライドを持つ、熱い職員が多いことも魅力ですね。

職員G: 先ほど台風の例を挙げましたが、想定外の出来事が起きても、何とかして引き渡しまでに工事を終わらせなくてはならないということがあります。そんなときに力を発揮するのも、国を守るという使命感に基づく「熱さ」があるからだと思います。

職員F: 熱い心を持つ仲間とチームとして働きたい人、国を守りながら技術者として成長したいと考えている方には、ぜひ防衛省で働くという選択肢があることを知っていただきたいと思います。

職員G: 厳しく複雑な安全保障環境の中で、日々の平和を守るため、防衛省・自衛隊の任務はますます重要になっています。施設整備という側面から自衛隊の活動を支え、日本の安全保障に貢献することに興味を持っていたら嬉しいですね。



整備計画局 施設技術管理官付
防護施設研究室防衛部員
2016年入省 技術系(施設系)
専門:土木

職員 G

熊本防衛支局 建築課
第2係長
2018年入省 技術系(施設系)
専門:建築

職員 F



多様な業務経験を通じて 国家の基本である 防衛、経済、外交に携わる

防衛装備庁 調達管理部調達企画課
調達企画室長
1997年度入省 技術系（装備系）

前例を踏襲せず、 新しい前例となることも良しとせず

防衛省で働く最大の魅力は、非常に幅広い分野の業務に携わりながら成長していけることだと感じています。私の場合、戦車や装甲車を調達する際の予定価格を決める部署を皮切りに、予定価格算定に必要な会社の利益等を決める経費率の算定、防衛省の調達に関する規則の制定、航空機、艦艇の予定価格算定や契約、プロジェクト管理などを行う部署で経験を積みました。

思い出深いのは、民間の優れた技術や製品を活用し、目標価格でより早期により優れた艦艇を調達する「企画提案」という仕組みを創出したことです。最近の我が国周辺や国際情勢を踏まえれば防衛調達においても過去と同じ考え方では対応できなくなっています。少子高齢化を踏まえた省人化も課題です。また、防衛力は防衛省・自衛隊だけでなく、防衛産業の皆様にも支えられており、その基盤維持・強化も重要な課題です。「企画提案」は、こうした背景のもとで考え出した仕組みで、『もがみ』型という護衛艦の調達において初めて採用しました。



役所である防衛省には前例踏襲の文化が根強いように思われがちですが、実は新しい考え方や技術の導入に対して貪欲です。私はこの「企画提案」が新たな前例踏襲を生み出すことにつながってはならないと考えており、時代の変化に合わせた新しい仕組みを今後も創出したいと考えています。

常に未経験の業務に挑戦できる喜びがある

入省から20年以上経過した今、私が感じているのは、若い頃よりもさらに新しい仕事に挑戦する喜びを味わっているということです。防衛装備移転に関する業務に携われたのも、その一例です。防衛装備移転は単に防衛装備品を外国に導入させるだけでなく、日本への理解を深め、日本との友好関係を深めさせる、いわば外交です。

私は、国家の基本である防衛、経済、外交のいずれかに関係する仕事がしたいとの志から防衛省を就職先として選びました。振り返ってみれば若手の頃は機械工学科出身という専門性を活かして戦車や装甲車の調達業務に携わり、その後は経費率算定などの業務を通じて企業や経産省の皆様から実地での経済を学び、そして期せずして外務省や在外公館の皆様と一緒に外交の業務を経験することができました。現在は防衛省の調達に関する規則を制定する等の業務を担当していますが、これまでの様々な経験が活かせる職場であると感じています。

このように防衛省では2年から3年で異動を繰り返しながら業務経験を重ね、それを活かしながら次々と新しい業務に挑戦できる環境があります。どんな業務経験もいつか必ず役立つという実感は、成長に向けての確かなモチベーションになります。



前例がないならば 多様な視点と柔軟な発想で 事業を前へと進めていく

防衛装備庁 プロジェクト管理部
事業監理官（宇宙・地上装備担当）付
事業監理官補佐（前任）
2009年度入省 技術系（装備系）

我が国の防衛産業の発展にも心を寄せながら

私の所属するプロジェクト管理部事業監理官（宇宙・地上装備担当）は、航空機、艦船、誘導武器以外の車両、火器、通信機、レーダー、衛星、グローバルホーク、需品器材といった装備品に関するプロジェクト管理や取得に関する企画立案等の業務を担当しています。また、国際装備課と連携して装備移転に係る事業なども実施しています。

装備移転の一例としては、2020年8月に契約が成立したフィリピンへの警戒管制レーダーの移転事業が挙げられます。私は2021年からこの事業を担当しましたが、当時は移転するレーダーの製造など契約の履行管理や、フィリピン空軍要員の航空自衛隊での教育への参加などを実施していく必要がありました。完成装備品としては初の成功事例であり、参考となる前例がない中、まさに手探りで事業を進めていきました。前例がないということは誰も経験した人がいないということであり、私にとって大きな挑戦となりました。

契約そのものは日本の企業とフィリピンの間で交わされたものですが、移転のための契約を着実に履行することによって警戒管制レーダーに対するフィリピンの評価が高まることは我が国にとって好ましいことであり、当然、他の装備品の移転の実現にも良い影響を与えていると考えています。



さらに我が国の防衛産業の発展にもつながっていくと期待されます。事業は既に後任に引き継ぎましたが、事業を進める上での判断

や方針については密に連携し、時には経験者の立場から助言するなど、引き続き高い関心を持って担当者と一緒に進めています。

育児休業の取得は、 父親としての人生を豊かにしてくれる

防衛省で働く魅力の一つとして、仕事と育児を両立できることが挙げられます。私は2020年に第一子が誕生した際、10ヵ月という長きにわたり育児休業を取得することができました。これほど長期間取得できたのも、私の不在中の負担を請け負う同僚や後任者の調整を行っていただいた上司の理解と協力があつたおかげであり、防衛省全体で男性の育休取得を応援しようとする風土があることは間違いありません。子どもは現在3歳になりました。父親として育児を行い、成長していく姿をすぐ近くで見られたことは貴重な経験であり、多くの方から「うらやましい」と言われました。父親としての人生を生きる上で、とても豊かな時間を持つことができたこと感謝しています。

また、防衛省では多様な経験を積む機会が用意されていることも大きな魅力です。私は法務省への出向や国内留学を経験しました。法務省では理系の出身者でありながら法律の勉強をすることができ、国内留学では大学院でプロジェクト管理について学びました。いずれも外部から防衛省という組織を見つめ直す機会になったとともに、他省庁や民間企業に人脈を広げることにもつながりました。これらの機会を通じて知り合った方々とは、今も連絡を取り合っており、様々な刺激を受けています。我が国を取り巻く様々な課題の中には、既存の思考では解決しきれない課題も多数あります。様々な視点と柔軟な発想でそれらと対峙していく上でも、多様な経験を重ねてこられたことは意義深いと感じています。



防衛装備庁プロジェクト管理部
事業監理官（航空機担当）付
事業監理官補佐
2015年入省 技術系（装備系）



理系としての
バックグラウンドを
日本の未来のために
活かしたい。

REAL VOICE



防衛政策局 戦略企画参事官付
総括班係員
2023年入省 技術系（装備系）
職員H

整備計画局 サイバー整備課
総括班係員
2023年入省 技術系（装備系）
職員I

数十年先の世界のため 長期的な視点で 次期戦闘機開発に携わる

日本の防衛に主体的かつ長期的な視点で携わる防衛省には、他の組織では味わえない大きなやりがいがあります。

現在私は、日英伊で共同開発中の次期戦闘機を担当するチームにおいて、国際機関の設立に向けて、英伊の担当者と共に主に会計制度及び契約制度に関する調整を行っています。次期戦闘機は2035年までに開発が完了する予定で、以後数十年にわたって日本のみならず世界の平和と安定に貢献することになります。国によって法体系が異なるために生じる認識の相違などを乗り越えながら調整していくのは容易ではありませんが、世界の安定のためにという大きな志のもと、英伊の同僚と思いをついにしながら同じ道を歩んでいることに確かな手応えを感じています。日本周辺の安全保障環境や国際情勢が変化中、遠く離れたヨーロッパの国々と手を携えて前に進んでいくことに大きなやりがいを感じます。

小さい頃の私は防衛装備品に対して、憧れを抱いていました。それはやがて防衛に携わる仕事をしたという気持ちに昇華していましたが、大学では防衛とは関わり薄いエネルギー工学を専攻していました。しかし、就職活動を通じて理系の知識を幅広く活用する装備系技官という仕事を知り、防衛省と防衛産業の間をつなぐことで日本の防衛に貢献できる点に魅力を感じて、入省しました。今こうして次期戦闘機プロジェクトに携わっていることに、不思議な巡り合わせを感じています。その喜びを使命感に変えて、しっかりとミッションを果たしていく覚悟です。

想像以上にフランクな風土

職員H：学生時代に私は「日本は技術大国と言われているけれど、日々技術力や軍事的脅威を増す国々がいる中で、その評判に慢心していいのだろうか。また、変化の大きい国際情勢の中、安全に暮らしていけるのだろうか」という思いがありました。

職員I：共感します。同じような危機感をもつ同期も多いですね。

職員H：なかでも、防衛産業に携わる企業が少なくなっているということを知り、私にも貢献できることはないかと思ったことが防衛省に興味を持ったきっかけです。

職員I：私の場合は、社会の役に立つ仕事がしたいという漠然とした思いが出発点でした。理系でしたから技術力で貢献したいと考え、防衛装備品に興味を持ち、防衛省を志望するようになりました。

職員H：装備系技官向けの説明会で、防衛産業基盤の強化が日本の防衛力強化には非常に重要であると聞きました。そこで、私も理系の



バックグラウンドを活かすことでこうした問題に取り組みたいと思い、本格的に防衛省を志望するようになりました。

職員I：最終的な決め手になったのは、「人」です。面接は笑い声上がるほどフランクな雰囲気でしたし、とても接しやすい方ばかりだと感じました。

職員H：入省前はきっと堅苦しい組織に違いないと思っていたのですが、実は同僚とも肩肘張らずに会話ができますし、休憩時間には雑談も楽しんでいます。

職員I：上司から「あの案件、頑張ったね」と声をかけてもらったときは、1年目の私のことを気にかけてくれているんだと嬉しかったです。

職員H：同期の仲もいいですよ。

職員I：私が「一緒にランチしない？」って誘うと、皆いつも付き合ってくれます。

職員H：部署は違っても、同期同士、顔を合わせる機会が多いのが嬉しいです。

業務を通じて視野が広がる

職員H：入省1年目の私たちは様々な案件を受け付けて調整する窓口業務が中心です。

職員I：課に寄せられた依頼の内容を検討し、誰に対応をお願いするか、必要に応じて先輩に相談しながら決めていきます。1日に寄せられるメールの数は膨大で、時には目が回るような忙しさです。

職員H：最初の頃は、自分にはとても対応できないと思ったものでした。



職員I：私もです。けれど数をこなしているうちに、自然と組織の全体像や防衛省がどんな課題に取り組んでいるかがわかるよ

うになりました。

職員H：防衛政策について幅広く見ることができるようになりました。私も興味の幅がずいぶん広がったと感じています。

職員I：好奇心が刺激されますよね。

職員H：ええ。世の中の最先端技術は防衛分野から生まれてくるものも多いので、その一端に触られるというのもモチベーションになっています。これからは単に案件をこなすだけでなく、自分なりの付加価値をつけたいと考えています。

職員I：理系の学生にとって防衛省という選択肢は遠いような印象があるかもしれませんが、でも、実際は活躍できる分野がたくさんあるので、ぜひ調べてみてほしいですね。

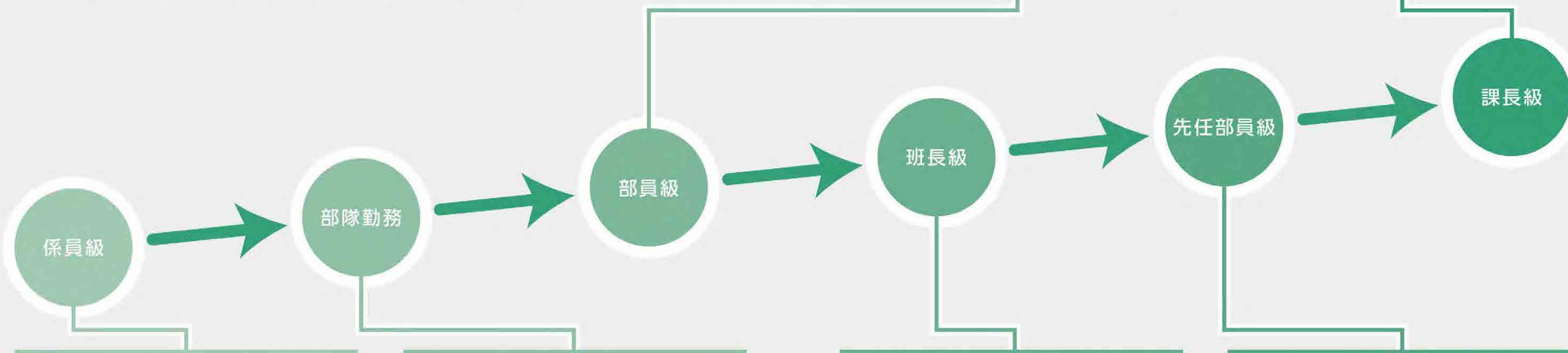
職員H：私もそうでしたが、技術系の公務員就職の場合、志望者が少なく不安になることも多いかと思います。そんなときはぜひ説明会に参加して、私たち職員に遠慮なく質問していただきたいです。

職員I：皆さんが防衛省に入省されるきっかけになれば、私たちも嬉しいです。

CAREER PATH

事務系キャリアパス

入省1・2年目は、本省内部部局等において行政官としての事務を学び、
3年目は自衛隊の司令部等で勤務することで、自衛隊の活動の現場等を学びます。
その後、係長を経て、他省庁の課長補佐に相当する「防衛部員」となり、
自らのイニシアチブで政策の企画・立案を行うことになります。
もちろん、海外留学や出向などを通じて多様な経験を積むことが可能です。



私のいる部署では、馬毛島施設整備の「総括」をしています。馬毛島施設整備は巨大な国家的プロジェクトであり、自衛隊、他省庁、地方自治体、米軍など、多くのアクターが関わります。（詳細は省HPをチェック!）そのため、関係各所に目を配り、全体をマネジメントしていくことが重要です。
私は係員として、他課の資料の確認や省内・対外説明の取りまとめを行いながら、上司をサポートしています。現在の業務は、地方自治体や米軍などとの関係の奥深さを学べるため、非常にエキサイティングです。
仕事をしていて嬉しいのは、自分の意見が上司から認められたとき、自分が成長できていると実感できたとき、そして自分の仕事が社会にプラスの影響を与えられていると実感できたときです。地域社会協力総括課、そして防衛省にはそれがあると確信しています。



地方協力局 地域社会協力総括課
総括班係員
2022年入省 事務系

3年目は、今まで勤務していた市ヶ谷を出て陸海空自衛隊の総監部等で自衛官の皆さんに囲まれて勤務しながら研修し、部隊に関する知見を深める1年間です。
私は現在、海上自衛隊佐世保地方総監部で勤務しており、部隊研修として実際に航行中の艦艇で何日も自衛官の皆さんと生活を共にさせていただくこともあり、どのような人たちがどのように任務にあたっているのかを肌で感じています。また、佐世保警備区内で行動する艦艇や航空機は近年、警戒監視等の任務が増大しており、市ヶ谷では感じることができないような緊張感が伝わってきます。
私達が携わる防衛政策は、日々練度向上に励み、時には過酷な状況でも任務を遂行する自衛官の皆さん一人一人の力によって支えられています。3年目の経験は、最前線で勤務する方々から大いに刺激を受けるとともに、部隊の実情を知り事務方としては一体何ができるのか考えることができる非常に貴重な機会になっています。



海上自衛隊 佐世保地方総監部防衛部第3幕僚室
企画調整専門官
2021年入省 事務系

現在、私は運用調整参事官付という組織で訓練などの平時の自衛隊の運用を通じ、いかに日本の抑止力を高めるかを統合幕僚監部などの自衛官や事務官と共に検討しています。部員の仕事は、過去の経緯を勉強し、現在の課題点を認識した上で、日本の平和の為に自分が良いと考えたことを、文書にし、それを防衛省内だけでなく、場合によっては国家安全保障局などの他省庁にも説明し、政策として実現していくことです。また、政策によっては同盟国や同志国の国防当局との調整も必要となり、そのような規模感の大きさがこの仕事の魅力の一つです。人間関係については、部員になると部下も複数人でき、部下を指導する一方、日々助けられています。また、上司である先任部員や参事官から指導や助言をもらい、組織の中で人間として成長させてもらっています。組織を超えた様々な仲間と苦楽をともしに一緒に日本の平和と安全に寄与できることが一番の仕事のやりがいです。



防衛政策局 運用調整参事官付
防衛部員
2016年入省 事務系

日米同盟は、日米両国の様々な関係者の目に見えない努力の蓄積によって支えられ高められています。日米防衛協力課は日米間の防衛協力を政策的に牽引する課であり、中でも調整班の業務は、防衛相会談や「2+2」をはじめとした日米協議、米国からの訪問者の対応です。日米間が対面で交わす言葉は、日米協力の重要性を確認し今後の協力の方向性を示すものです。あらゆる日米案件を包括的に把握し、米側と協議し、対外発信をしていくことを通じて、同盟強化の一助を担っているというやりがいを感じます。また、仕事でしか出会えない様々な同盟関係者と関係を築けるのも、仕事を越えた人生の財産となっています。班長は、チームとして最大のパフォーマンスを発揮できるような環境をつくれるよう、マネージャーの役割が期待されるチャレンジングなポストです。これからも、日頃から支えてくれる周囲に感謝の気持ちを忘れず、コミュニケーションと笑顔を大切に、チームとして良い仕事をしたいです。



防衛政策局 日米防衛協力課
調整班長
2011年入省 事務系

キャリアステップの「課長」というと、随分将来の話だな、と思われるかもしれませんが、ある日突然課長になるのではなく、この真にあるキャリアステップの最初のステージである係員から始まる経験を一つ一つ積み重ねていくことが次の役職を形作ることになるという言い方が正しいのではないかと思います。



私の所属する国際装備課は、今、大きな動きの渦中にあります。防衛装備行政70年の中でも、最も大きな変化が生じる中で、自らも変わらなければならない変革に迫られています。防衛装備移転と各国各機関との防衛装備協力は新たな段階に移行しています。私自身もこれまでの経歴の総力を挙げて取り組む責任を日々感じています。前例のない仕事の連続の中で、活力と新たな視点を提供してくださる皆さんとこのチャレンジに取り組めることを待ち望んでいます。

※本人は左端。写真は、ポーランドの物資集積拠点でのウクライナ軍との兵站調整後の一コマ

防衛装備庁 装備政策部
国際装備課長
2002年入省 事務系

自衛隊や在日米軍の活動をスムーズに行っていくためには、地域の皆様のご協力が不可欠です。そうした協力を得るために汗をかくこと、それが地方協力局の重要なミッションの一つであり、沖縄協力課はその中でも、沖縄エリアを担当している部署です。政府の重要政策である基地負担軽減を進めながら、戦略三文書に掲げる南西地域の防衛体制の強化や日米同盟の抑止力・対処力の維持向上を実行していくため、当課が果たすべき役割は、言い換えれば、これらに関する防衛政策を地域で、現場で、地元の協力を得るニーズは、日々高まっています。こうした中で私は、「先任部員」として課長を支え、施策の企画立案から個別のタスクの実施まで全体を把握しつつ、課員の仕事がスムーズに進んでいくようマネジメントに努めているところです。一つ一つの施策や事業が現場でうまく実行されていくのを見ると、大きなやりがいを感じることができます。



地方協力局 沖縄協力課
先任部員
2008年入省 事務系

出向
Working at
Other Ministries
職員

国家安全保障局

内閣官房 国家安全保障局
参事官補佐
2014年入省 事務系国家安全保障局で国の安全保障を
俯瞰的な視点から支える

私が勤務する国家安全保障局（NSS）はDIME（Diplomacy, Intelligence, Military, Economy）の全ての視点を備えた組織であり、総理の安全保障政策の判断を俯瞰的な視点から支える司令塔と言えます。設置から約10年が経過し、国家安全保障戦略の策定、平和安全法制の制定など、我が国の安全保障政策の歴史的転換点において重要な役割を果たしてきました。米NSCをはじめとする諸外国関係機関との連携も強化し、今や我が国の安全保障政策を進める上で欠かせない存在です。

NSSでは様々な省庁からの出向者が在籍し、それぞれの専門的知見を結集しながら、我が国が直面する厳しい安全保障上の課題に日々向き合っています。出身省庁の垣根を超えた仲間達とチームで政策課題に取り組めることがNSSで働く醍醐味であり、防衛、外交にとどまらない安全保障の裾野の広さを実感しながら、日々精進しています。



Messages from Officials Working at Other Ministries

内閣府

内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局
参事官（重要課題担当）付
2020年入省 技術系（装備系）内閣府で安全・安心に関する
シンクタンクの設立に尽力

私は内閣府科学技術・イノベーション推進事務局において、安全・安心に関するシンクタンクの設立準備を担当しています。安全・安心に関するシンクタンクは、国内外の技術動向、社会経済動向、安全保障など多様な視点から、我が国が戦略的に育てるべき重要技術等の調査研究を行うことを目的としています。シンクタンクの組織設計や調査・分析手法等について、内閣府内や関係省庁のみならず国内外のシンクタンクや大学等とも活発な議論を行い、新しい知識や知見を吸収する毎日で充実した日々を送っています。近年は科学技術の安全保障分野への積極的な活用も期待されており、科学技術・イノベーション政策の中においても防衛省の存在感が高まっていることを実感しています。日本を取り巻く安全保障環境が厳しさを増す中、科学技術・イノベーション分野をはじめ防衛省の活躍の場は年々と広がっており、そこが防衛省の魅力の一つだと考えています。

地方
Working at
Regional Branches
職員

陸上自衛隊東北方面総監部

陸上自衛隊 東北方面総監部
防衛部防衛課部外連絡協力班
企画調整専門官
2021年入省 事務系全国27万人の同僚が
共通の使命のために役割を果たす

一つの名を冠し、日本全国で27万人の同僚が、共通の使命のために各々の役割を果たす。そんな組織は、他にありません。

私は今、東北の陸上自衛隊を統べる総監部の一員として、仙台駐屯地で勤務しています。訓練や会議に立ち会う度に、所在部隊が連綿と築いてきた地域との信頼関係を目の当たりにし、隊員一人ひとりの努力の積み重ねが、我が国の安全保障に不可欠な大きな力であることを実感します。

事務官と自衛官は異なる視点で国防に向き合いますが、相互に作用する組織の両輪です。政策実現の背後には、それを支えてくれる27万人の心強い仲間が存在があります。その一方で、いつか自分が作成するたった1枚の紙が、仙台で出逢った大切な人たちの人生を左右するかもしれないのです。

その覚悟と責任の重さを胸に、まずは目の前の「みちのくの護り」のため、市ヶ谷の思考回路を知る事務官としての己の「責務の完遂」を目指し、日々前進しています。



※写真は空挺降下訓練研修の際、装員の装着を体験している最中のもの。
実際の隊員の装着状況とは異なります。

Messages from Officials Working at Regional Branches

沖縄防衛局

沖縄防衛局 調達部建築課
係員
2021年入省 技術系（施設系）政策としての防衛を、
技術力を以てリアルに落とし込む

沖縄防衛局で、米軍基地内の建築工事にかかる設計・工事監督を行っています。米軍の技術者や日本の設計会社・建設会社等と技術的な協議を積み重ねることで、工事を円滑に進められるよう、日々業務に取り組んでいます。

施設系技官の使命とは、「政策としての防衛をリアルに落とし込むこと」だと捉えています。言葉にするのは簡単ですが、本省での政策立案から地方の現場における工事まで、そのプロセスはあまりに膨大で、俯瞰的に把握するには技術的な知見をはじめ、様々な能力を求められます。何も知らないまま安全保障の世界に飛び込み、流れ着いた南の島で、とんでもない仕事に就いたものだと思う一方で、学びの尽きない毎日に幸せを感じながら、職務に励んでいるところです。

休日は一転、沖縄で知り合った友人たちと体を動かしたり、同期とドライブ（晴れた日の海は最高!）を楽しんでいます。自分自身、沖縄で生活するなど想像もしなかったですが、公私ともに充実した毎日を送っています。



海外
Working Abroad
職員

NATO 日本政府代表团

在ベルギー日本大使館
兼北大西洋条約機構 (NATO)
日本政府代表团
2005 年入省 技術系 (施設系)

NATO と日本をつなぐリンクマンとしての
使命を果たす

NATO 日本政府代表团で働いていると言うと、NATO で働いていると勘違いされることが多いのですが、実際は、外務省の在外機関である同代表团の一員として、NATO と東京をつなぐリンクマンとして日本のために働いています。

欧州の安全保障は、日本のそれとも密接にリンクしているため、NATO の考え方を知ること、また日本の考え方を NATO に知ってもらうことは非常に重要です。日本は NATO 加盟国ではないため、NATO 内部でどのような議論が行われているのかを知るためには、事務局や加盟国に足を運んでの地道な取材が欠かせません。同時に NATO が欲している日本の知見をインプットすることで Win Win な状況を作るように心がけています。

プライベートでは、NATO 関係者の休暇に合わせて長い夏休みをエンジョイしています。



Messages from Officials Working Abroad

在中国日本大使館

在中国日本大使館
一等書記官
2009 年入省 事務系

対中関係の最前線で
安全保障に向けた議論と理解を深める

日中は隣国同士ではありますが、安全保障に関して言えば多くの懸念があります。しかし、懸念があるからこそ、相手を理解して議論を重ねていくことが何よりも重要であり、大使館の大切な役割です。

かつて、訪中された大平元総理は、相手を知る努力は、決して容易な業ではない。日中両国は一衣帯水にして 2000 年の歴史的、文化的つながりがあるが、努力なく理解しあえると安易に考えることは危険であり、体制も違い流儀も異なる日中両国の間においては、理解するための自覚的努力が求められる旨述べられましたが、本質を突く言葉だと思います。

長い歴史と多様な文化をもったこの国を理解することは容易なことではありません。しかし、中国の官・民の方の生の声を聴き、文化・生活に直接触れることが大使館勤務の強みでもあり魅力でもあります。対中関係の最前線である大使館において、自覚的努力を続け、今後の業務につなげていきたいと思っています。

留学
Studying Abroad
職員

カリフォルニア大学バークレー校

大臣官房 秘書課付
2019 年入省 事務系

世界各国の法律家たちとの学びに
日々刺激を受ける

私は、現在、米国カリフォルニア大学バークレー校のロースクールで米国の法体系、国際法を中心に学んでいます。防衛省では、防衛関連の条約交渉やその国内担保法の制定に携わり、既存の国際秩序に対する深刻な挑戦に直面し、安全保障環境が厳しさを増す中で、米国を含む他国との協力関係を深め、かつ、自衛隊を含め日本自身が責任のある行動をとるためには、制度的・法的基盤の確立、法的素養を兼ね備えた人財の存在が不可欠であるということを痛感しました。伝統的学問分野としての法学と実社会における実践的ツールとしての法律の二面性、世界各国から集まった法律家たちとの学びに、日々刺激を受けています。

実務経験からの気づきを携え、日本を離れて、米国有数の多様性を誇るこの土地での生活は、自己の価値観の再認識や新たな視点の獲得につながっています。自分自身に新しい色をつけて日本に戻るよう、日々全力で過ごしていきたいと思っています。



Messages from Officials Studying Abroad

南カリフォルニア大学

大臣官房 秘書課付
2019 年入省 技術系 (装備系)

装備系知見の底上げと、
政策立案の基礎知識を獲得する

私は現在南カリフォルニア大学エンジニアリングマネジメント修士プログラムに在籍しています。先進技術を活用し、現在のオペレーションを革新するための戦略的アイデアの創出とそれを実現するためのシステムエンジニアリングとプロジェクトマネジメントを軸として、リーダーシップ論やチームワーキングといった、マネージャーとして必須となる知識の習得にも努めています。

エンジニアリングは問題解決の学問です。問題解決へ導く科学的アプローチやソフトウェアスキルは、実務にて成功や失敗を経験した今だからこそ嗅ぎさせられる視点が多く、また、学びをグループワークやプロジェクトとして即実践できる環境に日々充実感を抱いています。加えて、AIをはじめとしたゲームチェンジャー技術を高い解像度で学ぶことも可能です。このように、装備系としての知見の底上げをしつつ、将来の政策立案の基礎となる知識を獲得する機会をいただいていることに感謝しています。



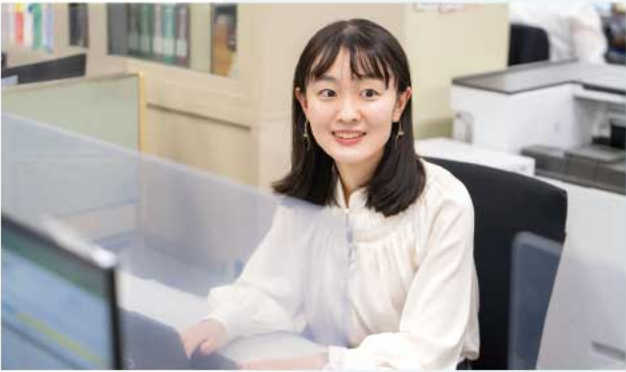


出勤後、海外の報道を含め、自衛隊の運用に関する情報を確認し、必要があれば、日本政府の立場を正確に発信するための準備をします。

「事態対処」をしていない時は何をしているのか?と思われがちですが、政策的見地から自衛隊の運用を支えるのが私の部署の職務であり、担当である「空」の運用、弾道ミサイル防衛等について、日々頼もしいエキスパートたちと調整をしています。この日は効果的な対空侵犯措置の効率的な在り方について議論を交わしました。



調整した内容について、省内外に説明を実施する資料を作成。企画した政策を実現するための「営業」も私の重要な仕事です。自衛隊の専門的な内容を、民主的な意思決定過程の中でいかに理解していただき実現させていくか、頭を悩ませる日々です。



完成した資料を用いて、大臣までご説明し、場合によっては、その資料が総理の手に渡ること。並行して、国会質問の通告が入れば答弁を作成し、関係課からの照会に目を通し、「空」の運用との関係でより良いものにできないか確認します。

退勤後、同僚や大学の同期と食事。リフレッシュして翌日を迎えます。

01 SCENE

02 SCENE

03 SCENE

04 SCENE

05 SCENE

1 day

我が国の平和と独立を守る
防衛省の業務の重要性を実感

平常時



事態対応時



職員の1日の流れ

防衛省の職員が普段どんな業務を行っているのか、運用に関わるある事務系職員の1日の流れを例に紹介します。

統合幕僚監部 首席参事官付
国内運用班専門官
2020年入省 事務系

SCENE 01

深夜でも早朝でも、北朝鮮の弾道ミサイル発射等、空の緊急事態が発生した場合は、防衛省に急行します。



SCENE 02

空の事態対処は、陸・海に比べてスピード感が早いのが特徴で、1分1秒を争います。対処に当たる現場部隊と省内外との意思疎通・指揮命令のハブとして奔走します。



SCENE 03

事態対処に係る総合調整と並行して、国民の皆様や国際社会に正確で効果的な情報を発信するため、自衛隊の対処能力を明らかにしない範囲で、対外公表の調整を省内外と迅速に行います。

SCENE 04

対処が終わった後は、初動対処に見直すべき点がなかったか、防衛力整備や関係国との協力も含め、中長期的に改善できる点はないか検討が続きます。自衛隊を実際に運用する場面では、自衛隊の抱える課題が顕在化します一見同じように見える「空」の事態において毎回異なる課題が見つかるのも、また醍醐味です。

SCENE 05



一連の対応が一段落し、「陸」「海」「国外運用」を担当する課の同僚と一息をつくことも、気を抜けない日々において貴重な時間です。責任を持つ領域は違えど自衛隊の運用に関わる者どうし、学びも多い時間です。



Q 防衛省を志望した理由、入省の決め手は何ですか？ QUESTION 01

- A

学生時代の平和活動の経験から、日本の安全保障環境の厳しさを実感し、大学では国際政治を学びました。急速に変化する国際環境の中で、常に最善策を探し続ける防衛省職員に魅力を感じ、平和とは何かを人生をかけて問い続けたいと考え、防衛省を志望しました。
- 誰もが安心して暮らすことの出来る社会を守ることに自分も貢献したいと強い思いを持っていたところ、厳しい安全保障環境下において、真にその思いを実現するには、防衛省で働かないかと思い、志望しました。
- 自分の得意分野と業務内容の合致、先輩職員の人柄、仕事の規模感など、自分の求める条件全てに当てはまった職場が防衛省でした。何よりも、安全保障という大切な目的を持って働くことができる点に惹かれました。
- ロシアによるウクライナ侵攻や北朝鮮のミサイル発射のニュース、防衛産業から撤退する企業が増えているということを説明会などで耳にして、私の技術的知見を活かすことができるのではないかと考えて志望しました。

Q 防衛省職員としてどのような目標を持って成長していきたいですか？ QUESTION 02

- A

日本と各国との防衛協力に問題意識を持って入省したため、防衛省の中で国際的なキャリアを歩みたいと考えています。他国との結びつきをより強固なものにするために、日本国内にとどまらない国際的な視点と高い語学力を持って海外の人とも仕事ができる人になりたいと思っています。
- 安全保障環境の変化に左右されず日本を安全な国にするために必要なことを取捨選択し、周囲の意見を取り入れながら柔軟に対応ができるような防衛省職員になりたいです。

Q 入省1～2年目で感じたやりがいを教えてください。 QUESTION 03

- A

防衛生産基盤強化法が成立した時にやりがいを感じました。入省してすぐの国会対応に最初は戸惑いながらも、同じ課の同期と支え合いながら乗り越えました。私が携ったのは法律成立の過程の中のわずかな部分でしたが、新しく法律ができた瞬間に立ち会うことができ、大変勉強になりました。
- 周囲の方々と少しずつ信頼関係を構築することで、案件をより円滑にこなすことができたとき、あるいは、日々案件に関わることを通して、少しずつ物事の全体像が分かってくることに、やりがいや面白さを感じます。

Q 入省後に感じたギャップはありましたか？ QUESTION 04

- A

プライベートも充実させられる環境が整っていることに良い意味でギャップを感じました。休日や有休を使って趣味に費やすことができ、日々の業務にも健康的なメンタルで臨むことができています。
- 想像以上に変化が起こりやすい組織です。働き方改革に非常に意欲的で、私の入省以来、数か月のうちに新たな試みが多数生まれています。在宅勤務や残業削減の実現に向け、これほどエネルギーが湧くとは思いませんでした。

Q 休日はどのように過ごしていますか？ QUESTION 05

- A

大学時代の友人たちと旅行やドライブに出かけたり、1人で自転車に乗って都内をブラブラと探索したりして、リフレッシュしています。また、社会人になってからはダイビングを始め、月に一度ほど海に潜りに行っています。
- 家でのんびりだらだら過ごすこともあれば、バイクでいろんなところに行っておいしいものを食べてリフレッシュすることもあります。休日に家から出ないと、職場との往復しなくなってしまうのでできるだけ外に出るようにしています。

Q 大学時代に打ち込んでいたことを教えてください。 QUESTION 06

- A

大学時代はダンスサークルでの活動に打ち込んでいました。特に学園祭で踊った時に見た、ステージからの景色は忘れられません。今でも、ダンスは続けていて、入省してからもダンスの公演に出ています。
- 学生だけで1人乗りのレーシングカーを作り、タイムを競うという部活に所属していました。PCを使った部品設計、金属部材の切断や溶接等の実加工、完成した車のドライビングと、様々な経験をしました。

Q オンライン研修や在宅勤務はどのように行っていますか？ QUESTION 07

- A

1年生は、3か月弱、週に2回オンラインで英語研修を受けます。また、在宅勤務も可能であり、資料作成に集中したい、課業時間の前後に予定があるなど、状況に合わせて、適宜在宅勤務としている職員も多くなります。
- 満員電車に乗ったりする必要はなく、仕事が終われば好きなことをすぐできるので気が楽です。職場に行った方がわからないことがあればすぐに先輩に聞くことができるのでメリットもありますが、状況を見て切り替えていきたいです。

Q 未来の後輩に一言メッセージをお願いします。 QUESTION 08

- A

防衛省はおもしろい仕事ができます。間違いありません！我が国周辺の安全保障環境が急速に変化する中で、防衛省の役割は大きくなってきていると思います。一緒に歴史の1ページを刻みましょう。
- 我が国の平和と独立を保つという防衛省のミッションを達成するためには、私たち若手職員の力が必要不可欠であると思います。皆さんと力を合わせて、崇高なミッションの達成のために頑張っていけたらうれしいです。



防衛装備庁 装備政策部装備政策課
総括班係員
2023年入省 事務系



防衛政策局 調査課
戦略情報分析室総括班係員
2023年入省 事務系



地方協力局 総務課
総括班係員
2023年入省 技術系(施設系)



大臣官房 参事官室
総括班係員
2023年入省 技術系(装備系)

Work & Life Balance

ワークライフバランスを支える制度

年次休暇(20日/年)

4月1日採用の場合、採用の年は15日。
残日数は翌年に繰越(20日まで)。時間単位で取得可能。

特別休暇

年末年始/夏季/結婚/忌引き/人間ドック
検診 等

GW・夏季・年末年始などに合わせた年次休暇の取得を推奨し、長期で休暇が取れるように取り組んでいます！

出産に関する休暇

産前・産後特別休暇/配偶者の出産特別休暇/妊産婦の保健指導・健康診断のための特別休暇/
妊娠中の休息・補食のための特別休暇/通勤緩和のための特別休暇/出生サポート(不妊治療に係る通院等)のための特別休暇

育児参加のための特別休暇

育児休業/育児短時間勤務/育児時間/育児参加のための特別休暇/
保育時間確保のための特別休暇/子の看護のための特別休暇

その他の制度

介護休暇/配偶者同行休業/フレックスタイム制/
テレワーク育児時間/育児短時間勤務/早出遅出勤務/超過勤務の制限 等

column

内閣府員のための
自休サポート
プロジェクト
★199★

防衛省では、子育てをしながら働くすべての職員が、不安なく育児と仕事を両立できるよう、様々な取り組みを実施しています。



(育児中の職員向けのセミナー・交流会イベントに事務次官も参加)

Utilizing
the
system

制度利用職員の声

制度を上手に活用して、理想の働き方を追求しています。

入省8年目から10年目にかけて2人の子供に恵まれ、育児休業を2度取得しました。初めての育休復帰後に勤務した国際政策課では、フレックスタイム制やテレワークを活用し、班長としての仕事と育児の両立を目指しました。

朝、娘を保育園に送り届けてから早めの8時15分に出勤し、17時に退庁して迎えに行く日々でした。週に1回以上はテレワークで働き、普段なら通勤にかかる時間を夕食の準備などの家事に充てました。

自宅でのテレワークは一人で集中する作業に向いていたため、他国との防衛相会談の資料作成などに取り組みました。出勤時には、上司への報告や、大使館職員や他課との打ち合わせなど、対面のコミュニケーションを優先しました。

大臣官房 秘書課付
防衛部員
2013年入省 事務系

共働きの夫と事前に調整し、オーストラリアとシンガポールに出張したこともありましたが、制限がある中でも工夫をすれば、理想の働き方に近づけると実感しています。

上司や同僚、そして家族の理解と協力に感謝し、後輩達の働き方の選択肢を増やせるように模索していきます。



採用チームから皆さんへ

「平和」は、究極のインフラとも言われている。

私たちの日常、すなわち社会・経済・文化などは、「平和」という土台の上に築かれているからだ。

しかし、令和6年1月の能登半島地震をはじめとする自然災害、

ロシアによるウクライナ侵略を含む国際社会の混乱など、

私たちは、平穏な日常がいつ崩れてもおかしくない状況に直面している。

ある人は、目を覆いたくなるかもしれない。

それでも、当たり前な日常を守るため、人々の笑顔を取り戻すため、誰かが汗をかかねばならない。

我が国の安全保障における「最後の砦」。

防衛省はこの唯一無二の使命を担い、その矜持を胸に、数多の難題に挑み続けている。

この国の輝かしい未来を願い、「平和」という人類普遍の願いをカタチにするために。

さあ、傍観者から当事者へ。

この国の、そして世界の「平和」を自分ごととして捉える「あなた」を、お待ちしております。

採用実績

		2024年	2023年	2022年	2021年	2020年
事務系	総合職院卒者	0	1	4	3	1
	総合職大卒程度	16	14	12	15	13
	合計(うち女性)	16(6)	15(6)	16(6)	18(7)	14(6)
施設系	総合職院卒者	3	7	3	2	2
	総合職大卒程度	5	0	4	3	4
	合計(うち女性)	8(2)	7(1)	7(1)	5(3)	6(0)
装備系	総合職院卒者	4	3	5	1	3
	総合職大卒程度	2	1	0	3	1
	合計(うち女性)	6(1)	4(3)	5(2)	4(1)	4(1)

※2024年は採用見込み

採用情報はこちらへ

